

# 「花散るらむ、それでも君と」

死を超えて響く、桜のメッセージ

満開の桜の下、前世で果たせなかった愛が時を超えて交わる。  
病を抱える少女と、失意に沈む教師が再会するとき、  
二人の命と記憶は切ない軌跡を描き出す。  
桜に託した想いは、どこへ届くのか。

作・金森努

## プロローグ

春山桜子が倒れたのは、満開の桜吹雪のただ中だった。  
中学二年の四月、そよそよとした春の風があたりを撫で、見上げる空には淡い陽射し。光を受けた桜が無数の花びらをきらめかせ、彼女と幼馴染の吉野京一の足元を舞い散っていた。  
ふたりは学校で配られた百人一首のプリントを手に、家へ帰る途中。気温は思ったより冷んやりとしていたが、桜が咲き乱れる川沿いの道は、それでも春の訪れを告げる温かな空気に包まれている。

「……桜、すごいね」

小さな吐息とともに、桜子は花の乱舞に目を奪われていた。指先で花びらをひとつすくい上げ、まるで透明な宝石のように見つめる。

風が吹くと、その花びらは儂く手からこぼれ落ち、京一のスニーカーの先へと舞い落ちた。京一は、少しだけ寂しそうな桜子の横顔を見つめる。彼女の肩越しには、淡いピンクの世界が一面に広がっていた。

「これ……学校で習ったばかりなんだけど」

桜子はポケットからプリントを取り出し、指先でそっとなぞる。  
「‘ひさかたの かりのどけき春の日に しづ心なく花の散るらむ’ って……のどかな春の陽射しなのに、どうして花は散るんだろう、って思ってる」

京一は桜子が見せてくれる短歌の文字を眺めながら、どう答えればいいのか思案する。

教科書的な解説なら知っている。だが、桜の下で語り合う桜子の声は、もっと切実なものを探めているように思えた。

「……さあ。桜は咲くのも散るのも、一瞬だから、かな」

語彙不足を自覚して、曖昧な返答しかできない自分をもどかしく思う。

桜子はうっすらと微笑んだ。まるで、京一の優しさごと受け止めてくれるかのような穏やかさだった。

「そっか。……でもね、こんなに綺麗なのに、一瞬なんだよね。そう考えると、ちょっと寂しいよね」

そう呟いた桜子の声が、ほんのわずかに震えた。京一はそれを見逃さず、思わず顔を寄せる。

「桜子？ 具合、悪いの？」

桜子は首を振って「大丈夫だよ」と言おうとした矢先、苦しげに額に手をやった。ふわりと揺らめく視界が、途端に暗転する。

「……え……っ」

次の瞬間、桜子の膝が崩れ落ち、京一の胸に凭れかかる形で倒れ込んだ。青ざめる唇、乱れる呼吸。

「桜子！ しっかりして、桜子っ！」

京一は慌てて彼女の身体を支える。周囲を行き来する通行人の何人かが驚いたように立ち止まり、京一は叫ぶように「救急車を呼んでください！」と声を上げた。

——しかし、その叫びは虚しく、桜子の意識は遠のいていった。

舞い散る桜の花びらが春風にさらわれる中で、京一は桜子を抱きしめながら震える。息を切らし、彼女の名を何度も呼ぶ。しかし、返事はない。

桜子は病院に運ばれ、そのまま息を引き取った。

教科書の中では美しく儂いだけの桜が、京一にとっては決定的に悲しい象徴となった瞬間だった。

——それから、十数年の時が過ぎる。

満開の桜は、あの日から何度も散っては咲き、京一の前を通り過ぎていった。けれど、桜が咲くたびに、いつも思い出す。あのとき間に合わなかった声と、伝えきれなかった想いを。

---

## 第一章 色のない春

### 1. 色を失った季節

四月の風は、ひどく冷たく感じられた。

吉野京一が勤務する聖南学院高校では、薄曇りの天候の中、新学期の始業式が粛々に行われている。敷地内の桜は満開のはずなのに、その魅力を映し出す陽の光が乏しく、まるで周囲の空気に溶け込んでしまいそうだ。

朝礼で並んだ生徒たちの背後には、ピンクの花びらがかすかに揺れている。どこか頼りなく、そして儂い。

「吉野先生、おはようございます」

声をかけてきたのは、数学教師の若松理香。やわらかな笑みを浮かべる彼女は、京一より二つ年上の先輩だ。

30歳という年齢には落ち着きがあり、どことなく面倒見のいい姉のようでもあるが、その目にはしばしば複雑な感情が交錯しているように見える。京一は、彼女が自分に何か特別な想いを寄せているらしいことに、うすうす気づいてはいた。しかし、どう応じればいいのかわからない。

「ああ、若松先生。おはようございます」

京一は礼儀正しく返すが、言葉は素っ気ない。彼は自分の心の奥底に沈殿した“あの日からの空虚”を、誰かと共有できるとは思っていなかった。

あの自分の大切な幼い恋人を連れ去った桜吹雪の日から京一は抜け殻のような人生を過ごしてきた。感情や意思が小さな愛する人、桜子と共に死んでしまったのだ。何事にも無気力で、親の命じるままに高校、大学と進学して教員免許を取り、親のコネでこの私立の中高一貫校で教員をしている。生徒に対する深い愛情もなければ、教師という職業に対する誇りもない。何事も、可もなく、不可もなく業務をこなしているだけの存在になっている。

「新年度、いよいよ担任を持つんですね？ 初めての一年生クラスですし、何かあったらいつでも相談してくださいね」

「ありがとうございます。まだ要領を掴んでないもので」

京一は笑みとも苦笑ともつかない表情を浮かべる。理香は何か言いたげな素振りを見せたが、周囲には他の先生方や生徒もいるためか、そのまま浅い笑みを残して去っていった。

京一の母がこの学園の理事長である——そのおかげで教師という地位に就けているのだが、同時にそれは彼にとって、常に重荷のように感じられる背景だった。どんなに努力しようとしても、「理事長の息子」という看板が先に立ってしまう。それも彼が抱え込んでいる虚無の一員にもなっている。

そして何より、春という季節が彼にとって憂鬱だ。十数年前のあの出来事が、彼の時間を止め、心に大きな穴を開けたまま。その穴は、いまだに塞がれていない。

## 2. 新しいクラス、蔵内櫻華

始業式が終わり、教師たちが職員室に戻ると、教頭の石川が声を張り上げる。「はい、みなさん、今年度のクラス担任と科目担当はもう確認しましたね。新任や若手の先生もいるので、わからないことは何でも私に聞いてください。規律と秩序をしっかりと守り、学園の品位を損なわぬようにお願いしますよ」

50代半ばの石川教頭は、学校の体面を何よりも優先するタイプだ。理事長の息子である京一に対しても容赦ない。むしろ厳しさは倍増しているようにも思える。

「吉野先生、今年は一年生の担任ですね。うちの学園は中高一貫ですが、高校からの外部入学もあります。しっかり指導をお願いします」

「……承知しました」

京一は名簿にざっと目を通す。そこに一際目立つ名前があった。

蔵内櫻華(くらうち おうか)——。

外部入学の生徒らしいが、どこか気になる響きだ。いや、気になるというのは単なる思い過ごしかもしれない。桜、という文字を含むそれだけで、胸の奥がざわついた。

クラスルームに向かうと、すでに生徒たちは着席していた。初々しい制服姿に緊張が漂う中、京一はホワイトボードに自分の名前を書き、「担任の吉野です。国語、とくに古文を担当します」と挨拶する。

声を出すたびに、小さな苦みが走る。自分が古文を好むようになったのはいつからだったのだろうか。あの桜子が倒れた後引きこもりがちだった自分を、父が奈良に連れ出してくれた旅行のことを思い出す。

「皆さんには、この一年間いろいろな経験をしてほしいと思います。勉強も部活動も、どちらも大切ですし、高校生活はあっという間ですから……」

言いながらも、どこか自分の言葉が上滑りしていると感じる。着飾った台詞ではなく、本心から伝えられるものがあるはずなのに、それが心から湧き出してこない。

「先生、よろしくお願いします！」

生徒たちが声をそろえる。その中に、一際目を引く少女がいた。おとなしく席に着いているが、どこか儚い雰囲気をもった印象だ。名簿を確認すれば、それが蔵内櫻華だった。

薄い色白の頬と、大きな瞳。すこし緊張しているのか、肩が強張っている。

「蔵内です。体調が安定しない時があるかもしれないんですけど……がんばりますので、よろしくお願いします」

櫻華は椅子から立ち上がり、ぺこりと頭を下げる。その姿にクラスメイトたちも興味を示したようで、小声の囁きが起こる。「病気なのかな」「大丈夫なのかな」といった不安混じりの視線。

櫻華は気に留める様子もなく、しんと静まった空気の中に座り直した。そのとき、一瞬だけ京一の目と合う。驚くほど深い瞳——なぜか胸が強く締めつけられる。

「……こちらこそ、よろしく」

京一は小さく頷いた。懐かしさと戸惑いが入り混じった、不可解な感覚。まるで、どこかで知っていたような人。だが、思い当たる節はないはずだ。

### 3. 花びらの記憶

朝のホームルームを終え、生徒が教科書の用意や移動教室で慌ただしく動き始めると、京一はふと教室の窓辺へ目を向けた。校舎から見下ろす中庭には、大きな桜の木がある。満開の花びらが、風に舞っては、地面に淡い絨毯を作っている。

あまりにも、美しくて悲しい。自分にとって桜は、そんな二面性を持った存在だ。咲いているだけで胸が痛む。それでも、目を背けきれずにいる。

「——先生」

背後から小さな声がかかった。振り向けば、そこには先ほどの蔵内櫻華。すでにカバンを手にして立っている。クラスメイトたちはざわざわと廊下へ出ていき、今この教室にはあまり人影がない。

「どうした？」

「……桜、綺麗ですね。さっき外を歩いたら、花びらがたくさん舞ってて……」

櫻華はかすかな笑みを浮かべる。だが、その瞳の中にはほろ苦い憂いが見え隠れするようだ。

「うん。もう散り始める頃かもしれないけど、満開のときとはまた違う趣があるよね」

自分の声が、わずかに震えている気がする。桜を話題にするだけで心が乱されるのは、いつになれば慣れるのだろうか。

櫻華は何も言わず、窓の外を眺めた。舞い散る花びらは一枚一枚が小さく、けれども集まれば薄紅のシャワーのようにも見える。

どこか人が立ち入れない静寂の世界。それを見つめる彼女の瞳は、遠い昔を思い出しているかのようにぼんやりと潤んでいた。

「先生って、古文の先生ですよ」

「ああ、一応古文担当。中学までは現代文中心だったけど、高校からはどんどん古典が増えるから」

そう答えると、櫻華はさらに小さく笑う。

「……私、古文とか百人一首、好きなんです。昔の歌なのに、不思議といまの気持ちにも重なる気がして」

少し息を継いでから、言葉を続ける。

「だから、先生の授業、楽しみにしてますね」

その発言がどういうわけか、京一の胸をちくりと刺激する。かつて桜子も、あの短歌を愛おしそうに眺めていた。あるいは、そんな光景を自分は思い出しているのか。

桜を見つめる少女と、昔の桜を見つめる記憶が、ほのかに重なり合う——。それがたまらなく不思議で、言い知れぬ切なさを京一にもたらした。

「そうか、じゃあ……最初の授業でいくつか和歌を紹介するよ。きっと楽しめると思う」

精一杯の冷静さを装いながら、京一はそう言う。櫻華は「あ、ぜひ！」と小さく弾んだ声を上げた。ほんの一瞬だけ、先ほどの憂いが消え、十六歳らしい無邪気さが顔をのぞかせる。

その笑みが、京一の胸に奇妙な温もりを残した。

かすかな既視感——桜子の笑顔と、どこか重なるものがあるような気がする。それが錯覚だとしても、この子が醸し出す雰囲気、桜の季節とリンクして、京一の心をざわつかせるのだ。

教室を出た櫻華の後ろ姿を見送りながら、京一はひとつ息をつく。

まるで、色の失われた春の景色が、わずかに彩りを取り戻したような、そんな微かな揺らぎを感じた。

## 第二章 ゆれる影、ゆれる花

### 1. 遠い痛みと小さなため息

教室の窓から差し込む淡い陽射しの中、蔵内櫻華はノートにペンを走らせていた。授業は英語。教師の声が黒板に書かれた例文とともに教室を支配しているが、櫻華の意識はその隙間をふわりとすり抜け、校庭の桜へと向かっていた。

昨日、担任の吉野京一と交わした何気ない会話——あれが頭の中で繰り返し再生される。

「私、古文とか百人一首、好きなんです。昔の歌なのに、今の気持ちと重なる気がして」

あのとき、自分は確かにそう言った。吉野の眼差しが、ほんの一瞬、痛々しいほど揺れたように見えた。それが記憶にこびりついて離れない。

(先生は、どうしてあんな顔をしたんだろう)

胸の奥がひそかに熱くなる。まだ、名乗るほどの想いでもないはずなのに、彼の姿を思うと不思議と切なくなる。まるで、ずっと昔から知っていたような、懐かしくも苦い感覚。

窓辺を見やれば、桜の花びらがちらちらと散り始めている。特有の儚さが、美しさと切なさを同時に胸に運んでくる。

櫻華は小さくため息をついた。自分の心臓は、周囲にはわからないほどの弱々しい鼓動を刻み続けている。それを裏付けるように、たびたび視界がじんわりと霞むことがある。

「……あと、どれくらい、見られるのかな」

そんな独り言が、唇から微かに漏れた。桜が散りきるより先に、自分が倒れてしまうのか——そんな不安が、頭のどこかを過る。

「ねえ、櫻華。聞ってる？」

隣の席から突っついてきたのは、松本美羽。中学時代からの親友だ。

「ごめん、美羽。ぼーっとしてた」

「また体調悪いの？ 寝てていいんだよ。あたし、ノート取っとくから」

美羽は少し強気な口調だが、櫻華の病気のことを気遣ってくれる優しい友人だ。櫻華は首を横に振った。

「ありがと。でも、大丈夫。ちょっと考えごととしてただけ」

「ふうん。ならいいけど……無理しないでよ？ あとで先生に怒られても知らないから」

美羽はそう言って軽くウインクする。二人の音量は、周囲のざわつきに紛れて授業の邪魔にはならない。

櫻華はノートを閉じ、ふと英単語のプリントに目を落とした。『ephemeral(儚い)』という単語が、蛍光ペンで引かれているのがやけに目に焼きつく。

(儚い、か……桜も、命も、いつか散る。だけど、その一瞬に何を感じ、何を伝えるのか——それが大切なんだよね)

英語教師の声が淡々と続いている。櫻華は懸命に授業に意識を戻そうとするが、心のどこかで桜と吉野京一の影が離れない。胸の奥に小さな痛みと温もりが同居するような、そんな感覚に戸惑いながら、筆を再び走らせた。

## 2. 桜の木の下約束

昼休み。校舎内の食堂は新入生たちで賑わい、どのテーブルも混雑していた。

櫻華と美羽もその中に並び、トレーを持って列に続く。ちらほらと桜色のメニューがあるのは、春限定の特別企画らしい。

ほんのり桜風味を謳うシフォンケーキや、桜の塩漬けを添えた和菓子が並ぶ光景を見て、美羽が「あー、めちゃくちゃインスタ映えしそう！」と声を上げた。

「櫻華も食べる？ 甘いのが苦手だっけ？」

「……うん、でも気になるかも」

そう言いながら、櫻華は少し意欲のない微笑みを浮かべた。心臓の病気のせいで、味覚や食欲の変化もあったし、量もあまり食べられないのが日常だ。

それでも、美羽が何か楽しいことを見つけたときに、できるだけ一緒に喜びたいと思う。限りある時間の中で、些細な幸せを共有したい——それが櫻華なりの生き方だった。

二人は会計を済ませ、偶然空いていた窓際の席へと向かう。さすがに新入生が大勢詰めかけていて座席数もギリギリ。かろうじて確保できた場所に腰を下ろすと、美羽がぼつりと言った。

「そういえば、担任の吉野先生、思ったより若いよね。しかも古文担当なんて渋い。ちょっとカッコよくない？」

一瞬、櫻華の心臓が跳ねる。だが、表情に出ないように気をつけて、スプーンを桜風味のデザートに差し込んだ。

「うん、……そうだね。なんか、すごく物静かだけど、優しい感じがする」

「そーお？ クールすぎるっていうか、なんか近寄りたいたい雰囲気ない？ 櫻華は国語の先生が好きなのかな」

美羽は軽い冗談まじりにそう言ったが、その言葉に櫻華は思いのほか動揺した。好き——とまでは行かないにせよ、心がざわつく事実は否めない。

「ま、別に……。ただ、なんだか不思議で、最初に見たときに懐かしいっていうか……」

言葉が途中で詰まる。自分でも説明がつかない。

何を言ってるんだろう、と内心焦るが、美羽は「ふーん？」といぶかしんだ顔を見せたのみだった。

窓の向こうに広がる中庭が見える。そこには大きな桜の木が一本。枝先には残った花びらが揺れ、下には薄紅色の絨毯が敷かれ始めている。

どこかで見た景色だと、櫻華は胸の奥底がざわめくのを感じた。

「……ねえ、美羽。午後の授業が終わったら、あの桜の下に行ってみない？」

唐突にそう切り出すと、美羽は目を丸くした。

「なんで急に？」

「なんとなく……散る前に、近くで見たくて」

櫻華はうつむきがちに答え、手の中でスプーンをぎゅっと握る。桜に惹かれる理由



は自分でもはっきりしない。ただ、あの木の下に立つと、何か大事なものを思い出せそうな気がする——そんな漠然とした確信があるだけだった。

### 3. 医務室での戸惑い

午後の最初の授業が始まって少し経ったころ、櫻華は軽いめまいを覚えていた。黒板の文字が二重に見え、胸が苦しくなる。

ノートを取ろうとする手が震え、汗がじっとりと浮かぶ。美羽が「大丈夫？」と囁くのを聞き、櫻華は首を振った。もう少し、あと少しだけ我慢すれば——そう思った矢先、視界が白んだ。

ギシッと椅子を立ち上がる音が教室に響く。

「あの……すみません、先生。ちょっと保健室に行かせてください」

声はしぼり出すようにか細い。先生は授業を止めて櫻華に視線を向けた。美羽がさかさず手を挙げる。

「先生、あたしが付き添います」

事情をよく知らないクラスメイトたちがざわついたが、教師は「気をつけて行ってきなさい」と短く告げるだけだった。

保健室にたどり着くと、櫻華はベッドに腰かけて深く呼吸をする。保険医が脈を測りながら、「大丈夫？ 今日冷え気味だし、無理は禁物よ」と声をかける。

美羽は心配そうに、櫻華の額に手を当て、「熱はなさそうだけど……ほんとに大丈夫？」と繰り返す。

「うん、ごめんね、美羽。ちょっと貧血になっただけかも」

櫻華は苦笑いしながら、過去に何度も経験してきた同じ症状だと思う。病院で何度も検査した結果、「拡張型心筋症」——先天的に心臓がうまく働かないという難病。

最悪の場合、移植手術を待つしかない。それでも順番がすぐ来るとは限らない。それが自分に与えられた現実だ。

保険医が「少し横になってなさい」とカーテンを引き、ベッドに櫻華を寝かせる。美羽は授業に戻ると言い残し、背を向けたが、その際にちらりと「本当に無理しないでよ」とつぶやいた。

カーテンの向こうで人の気配が遠ざかると、櫻華は一人、天井を見上げる。

(……なんで、あの人の顔が浮かんでくるんだろう)

吉野京一の表情が、まぶたの裏に映る。あの少し寂しげな眼差しに、自分の気持ちが揺さぶられる。説明のつかない感情——切なさや懐かしさが混在した痛み。

桜が散るように、いつかは終わってしまう命なのだろうか。  
それでも、今度こそは後悔だけはしたくない。そう思うのに、体はやはり思うように動いてくれない。

「……やらなかった後悔より、やって後悔か」  
幼い頃から言われ続けてきた、誰かの言葉を思い出す。誰の言葉だったのか、とっさには思い出せない。けれど、それは古い記憶に根を下ろした大事なメッセージのようにも感じる。

外ではチャイムが鳴り、次の授業開始を知らせる。  
薄ぼんやりとした頭の中で、桜の花びらが風に吹かれ散るイメージが浮かんで消えていった。

#### 4. 放課後の桜の下

保健室でしばらく休んだおかげで、櫻華は体調をどうにか持ち直した。最終授業が終わって教室へ戻ると、美羽が「少しはマシになった？」と駆け寄ってきた。  
「うん、心配かけてごめん。ちょっと横になったら楽になった」

クラスメイトたちは部活の見学や、帰宅準備でぞろぞろと教室を出ていく。櫻華は美羽と視線を交わし、昼に約束していた桜の木へ向かうため廊下に出た。  
窓から見下ろす中庭は、夕暮れの気配が少しずつ混ざりはじめ、桜の薄紅色に黄金色の混じった光が差し込んでいる。

「あ、先生がいるよ」  
美羽が小声で指さした先を見ると、そこには吉野京一の姿。校庭で何かを考え込むように立ち止まり、桜を眺めているようだ。

「……ほんとだ」  
不思議な胸の痛みが、また櫻華の心臓をぎゅっと締めつける。まるで、あそこに行けば何かが始まる——そんな気がする。

「ねえ、美羽、先に行って。あたし、ちょっと……担任の先生に、話があるから」  
「は？ 何それ、面白そう。後で教えてよ」  
美羽はからかうように笑ったが、そのまま先に階段を降りていった。櫻華は一度深呼吸をしてから、ゆっくりと京一のもとへ歩を進める。

中庭に出ると、春の空気が頬に触れる。ほんの少し肌寒く感じるのは夕暮れのせい  
か、自分の体調のせいかな——それとも、胸の鼓動のせいかな。

京一は桜の木に目を向けたまま、気づいていない様子で立ち尽くしている。足元には花びらが散り積もり、風が吹くたびにふわりと舞い上がる。

「あの……先生」

櫻華が声をかけると、京一ははっと肩を震わせて振り返った。淡い光が彼の横顔を照らし、どこか物憂げな表情が映し出される。

「蔵内……どうした？ もう帰る時間だぞ」

「はい、でも、どうしても桜が見たくて」

櫻華は控えめに桜の枝を指さす。京一の視線が、その指先に添うように外れる。

ほんの数秒の沈黙。桜はさらさらと枝を揺らし、二人の間を柔らかい香りで満たしている。京一は軽く息をついて、目を細めた。

「……この桜、綺麗だけど、そろそろ散り始めているな」

櫻華は小さく頷いた。

「先生は、桜が好きですか？ それとも……」

言葉を飲み込みかける。桜が好きじゃない、という人もいるから。好きでも、嫌いでも、どちらにせよ桜にはいろいろな思い出がつきまとう。

京一は答えないまま、花びらの舞い落ちる空を見上げる。すべてが夕陽に溶けかけて、淡く薄紅から金色へと移ろう一瞬。

その横顔は、悲しいくらいに美しく、どこかで見た面影を宿しているようにも思えた。

意を決したように、櫻華は小さく息を吸う。

「私……先生の授業が楽しみなんです。古文の歌とか、もっと知りたくて。……もしよかったら、放課後に少しだけ教えてもらえませんか？」

唐突かもしれない。けれど、思いを押し殺し続けるのは自分にはできない。限られた時間の中で、やりたいことをやらずに後悔するのは嫌だ——それが櫻華の意志だった。

京一は驚いたように瞬きをする。教師と生徒、それ以上でも以下でもない関係。普通なら、課外で個人的に教えるなんて重荷になるかもしれない。

「……君、体は大丈夫なのか？ 無理しない方がいいんじゃない」

「大丈夫です。むしろ、こうしていたいんです。桜が散る前に……いろいろ学びたい」

言いながら、櫻華は胸の奥を痛める。まるで、桜が散ると同時に自分のすべても消えてしまいそうな——そんな漠然とした不安がある。だからこそ、惜しむように、必死に時間を抱きしめたい。

京一は困ったように、視線を桜から櫻華へと移す。

その瞳に映る櫻華の姿は、ほんの少しの間、桜子と重なって見えた。否、それは気のせいだ。けれど、“誰かを失った記憶”が心の底を搔きむしるように疼く。

「……わかった。週に一度くらいなら、放課後に自習を兼ねて教えてやるよ。教頭に見つかったら怒られるかもしれないけど」

苦笑いを浮かべた京一の言葉に、櫻華はほっと安堵の息をつく。

「ありがとうございます。……絶対、怒られないように気をつけます」

二人の間に吹く風が、桜の香りをまとって舞い散る。

儂く、そしてどこまでも柔らかな時間。櫻華は夕陽に染まる一輪の花びらを手のひらで受け止め、そっと見つめる。

京一の胸にもまた、名状しがたい郷愁がこみ上げる。桜を見るたびに疼く痛み——それを乗り越えることができるのだろうか。

やがて、美羽が「遅いよ！」と駆け寄ってきて、少し気まずそうに教師と生徒のやり取りを眺めた。京一は素っ気なく「もう帰りなさい」と言い、背を向ける。

残された櫻華は、美羽に手を引かれながら振り返る。京一の後ろ姿と、薄紅の舞い散る桜。少しずつ遠ざかる景色が、切ないほど愛しく感じられた。

## 第三章 遠ざかる鼓動、近づく想い

### 1. 夕暮れの追憶

放課後の校舎は、白熱灯の照明が点るまでの短い間だけ、夕暮れの色に染まる。

吉野京一は、古文準備室の机に向かい、使い古した資料集を繰り返しめくっていた。窓際から覗く橙色の光が、紙面を柔らかく照らし出す。

その束の中に、百人一首の解説プリントが数枚混じっている。

「やると言っちゃったけど……ほんとに個人的に教えて、大丈夫かな」

小さくつぶやきながら、京一は首をかしげる。教師と生徒、それ以上でも以下でもないはずが、胸の奥にかすかな違和感が生まれつつあった。

——桜の木の下で見せた、蔵内櫻華の瞳。あのとき、どうして自分は“桜子”の面影を感じ取ってしまったのか。

同時に、桜子の死以来ずっと封じ込めてきた“痛み”が、少しずつ解け始めるような感触もあった。まるで、冬に閉ざされていた大地が春に向けて芽吹くように——だが、そこで再び失うのが怖い。

「吉野先生、まだ残ってたんですか？」

突然、扉の向こうから声がかかる。顔をのぞかせたのは数学教師の若松理香だった。少し心配そうに眉尻を下げている。

「今日の職員会議はとっくに終わったし、もう帰ってもいいんじゃないですか？」

「ああ……そうですね。ちょっと、来週の授業準備をしていただけなんで」

理香は準備室に入りかけたが、どこか言いづらそうに立ち止まる。京一は「何か？」と目で促す。

「いえ、その……最近、蔵内さんと話してるところをよく見かけるんで、気になって。あの子、身体が弱いらしくて……」

「……知っています。体調を崩しがちだとも聞いています」

「そうなんです。もし何か気になることがあったら、教頭や保健室の先生にも相談してみてくださいね。何かあってからじゃ遅いですし……」

理香の言葉には、教師としての心配よりも、もう少し踏み込んだ感情が混じっているように感じられる。京一はわずかに胸を締めつけられる思いだった。

「わかりました。ありがとうございます。……そろそろ、帰ります」

そう答えると、理香は小さく笑って「じゃあ、一緒に玄関まで行きましょう」と言う。ふたりは消灯した廊下を並んで歩き、昇降口へ向かった。

夕闇が迫る空には、早くも冷たい風が混ざり始めている。校庭の桜のシルエットは、薄紫の影の中に沈みこんでいた。

(あの日、桜子が倒れた夕暮れも、こんな風だったのかもしれない)

闇へと溶けていく桜の姿を眺めながら、京一は胸の底にかすかに疼く記憶を抱え込む。

いつか、桜が怖くなくなる日は来るのだろうか——そんな問いが、答えを見つけられないまま夜の風にさらされていた。

## 2. 病院という“日常”

翌週の半ば、蔵内櫻華は定期検査のために学校を早退し、病院へと向かった。バスの揺れを感じながら、制服のスカートの上にノートを開く。そこには、吉野京一が前日にプリントしてくれた和歌が数首、短い注釈とともに記されていた。

(“命の儂さ”を詠んだ歌……)

筆跡から、京一が時間をかけてまとめてくれたのが伝わってくる。その事実だけで、櫻華の心はどこかすぐったい喜びに包まれる。もっと知りたい——ただの好奇心

か、それとももっと昔の、例えば誰かの記憶なのか。自分でも判断がつかないまま、文字を追いかける。

病院の建物はどこか無機質な白い壁に囲まれ、入り口を行き交うのは具合の悪そうな患者や、その家族たち。

受付を済ませて、廊下のベンチで待っていると、すぐに主治医の佐伯が顔を出した。四十代前半の落ち着いた物腰で、どこか悲しげな眼差しをたたえている男性医師。

「今日も定期検査ですね。蔵内さん、調子はどうですか？」

「……悪いというほどでもなく、でも良いわけでもなく、って感じです」

櫻華は苦笑いを浮かべる。脈の乱れや息切れが最近増えているのを自覚していても、それを素直に伝えるのは勇気がある。佐伯医師はそんな彼女の顔色を見て、小さく息をついた。

「診察室に入りましょうか。お父さんとお母さんは、先に来て待っていらっしやいます」  
そう言って、佐伯は気遣わしげに櫻華の荷物を持ってくれる。

診察室には、蔵内の両親がすでに座っていた。

母・志穂は娘を見るなり「大丈夫？ 無理してない？」と声をかける。父・一徳は心配そうに眉間を寄せながらも、櫻華の表情を探るような視線を送っていた。

「特に悪くはなっていないから大丈夫だよ。学校も楽しく行けてるし……」

そう言いながら、櫻華は父の視線から逃げるように目を伏せる。実際、体調は決して良いとは言えない。でも、父や母が自分の病気を気に病む様子を見るのが、何より辛かった。

佐伯は問診のあと聴診器をあて、心電図とエコーなどの検査を淡々と進める。モニターに映し出される心臓の動きは、やはり健常者とは違い、拡張不全のリズムが鮮明だ。

「……脈の乱れが少し増えていますね。薬でコントロールしながら、なるべく安静を保ちましょう。無理は禁物です」

佐伯の口調は優しくも、はっきりと警告するものだった。櫻華の母・志穂は肩を落とし、父・一徳は陰しい表情で医師の言葉を受け止めている。

櫻華は俯いたまま、ベッドの端で手を組み合わせる。

「……私、このまま普通に高校生活を送れないんでしょうか。部活を見学してみたくても、運動系は無理だし……」

ぽつりと本音をこぼすと、佐伯は困ったように眉尻を下げる。

「やりたいことは、なるべく可能な範囲でやってほしいと思っています。命は、いつどうなるか本当にわからないですから……ただ、危険を伴う行動は控えて。あなたの身体を最優先に考えなければなりません」

いつだってそうだ。自由にやりたいことをやれる健康な身体とは違う。でも、“やりたかったことをやれずに終わる”という苦しみを抱いたまま、もし命が尽きたら——。そんなふうにと考えると、櫻華はひどく心がざわつく。

「……わかりました。ありがとうございます、先生」  
萎縮しかけた気持ちを奮い立たせるように、櫻華は消え入りそうな声で返事をする。佐伯は「また何かあったらすぐに連絡を」と静かに微笑んで診察を終えた。

### 3. 父の不安と娘の決意

診察後、父の一徳が「少し話がしたい」と言って病院のラウンジへ向かった。母・志穂は「検査の受付で書類を出してくる」と席を外し、櫻華は父と二人きりになる。

白いソファに腰掛け、窓の外を見ると、夕陽に照らされた街並みが遠くに見える。病院特有の消毒液の匂いが鼻を刺激する中、一徳は何も言わず深刻な面持ちでいた。

「……お父さん、何か言いたいことがあるなら、はっきり言ってよ」  
沈黙に耐えかねた櫻華が切り出すと、一徳は重々しく口を開く。

「お前、高校で……何か気になる先生がいるのか？」  
「えっ……どうして、そんな話に……」  
一瞬、心臓が跳ねる。まさか、父が吉野京一存在に気づいているとは思わなかった。

「お母さんが、ちょっと耳にしたらしい。クラス担任の先生が割と若くて、蔵内がやたらと楽しそうに学校に通ってるって。美羽ちゃんのご両親からちらりと聞いて……な」  
どうやら、美羽の親が「蔵内さん、担任の先生を好きなのかも」的な世間話を漏らしたらしい。そこから母を経由して、一徳の耳にも入ったようだ。

「……別に、気になるとかじゃないよ。先生だし」  
そう言いつつも、櫻華の声は弱々しい。自分が何を思っているか、まだはっきりとはわからない。ただ、桜を見るたびに思い浮かぶ彼の姿は、どこかしら心をひきつけてやまない。

「……櫻華」  
一徳は娘の名を呼ぶ。その声には深い憂慮が滲んでいた。  
「お前の時間は、限られてるかもしれない。医者からも、いつ心臓が限界を迎えるか

わからないって……。だからこそ、お前が幸せになれる道があるなら、お父さんは全力で応援したいんだ」

そう言いながら、一徳の瞳が潤む。

「でも、もし相手が先生で……。何か問題を起こすことになったら、せつかくの学校生活が大変なことになるかもしれない。一番辛い目に遭うのはお前なんだよ」

一徳の言葉は、正論だった。教師と生徒の距離感を間違えれば、学校側からも糾弾されるし、周囲の目もある。

櫻華はぎゅっと拳を握り、下唇を噛む。

「……私は、そんな迷惑かけるつもりじゃない。ただ……。先生の授業をもっと受けたいだけで。もしかしたら、先生と一緒にいると何か大切なものが見つかるかもって思うだけで……」

言いながら、病院の壁が重苦しく目に映る。父の不安は痛いほどわかる。でも、自分の気持ちはどうしようもなく“あの人”に惹かれ始めているのも事実だ。

一徳は娘の様子を見つめ、長いため息をつく。そして、そっと櫻華の頭に大きな手を乗せた。

「お前が後悔しない生き方をしてくれるなら、父さんはそれを支えるよ。何もできないけど……。もし本当に好きな人がいるなら、その人に伝えたいことは伝えるべきだと思う」  
「お父さん……」

「ただ、何かあればすぐ教えてくれ。お前一人で抱え込むな。……お前は、まだ16歳なんだから」

その言葉に、櫻華は不意に涙が込み上げそうになる。幼い頃から、甘やかされてきたという自覚はあった。でも、それもすべて父と母が自分の命を少しでも延ばそうとして、笑顔を見せてほしいと願ってきたからだ。

いまの父の声は、切実に“娘の幸せ”を祈る響きそのものだった。櫻華は細い肩を震わせながら、小さくうなずく。

「……ありがとう。お父さん」

#### 4. 再会、そして迷い

病院での定期検査から翌日、櫻華は少し疲れが残っていたものの、どうしても遅れた授業を取り戻したくて学校へ行った。

昼休みに校庭を見下ろすと、先週まで華やかだった桜が、かなり散って枝先だけに



わずかな花を残す状態になっている。若干の緑色が混じり始め、季節が移り変わろうとしていた。

「もう、終わっちゃうんだね。桜……」

櫻華が校舎の窓から、物憂げに呟くと、隣にいた美羽が「そうだね」と相槌を打つ。「でも、来年もまた咲くんだよ？ ……来年こそ、満開の時に花見したいね」

美羽の明るい言葉は、櫻華の中に一瞬の沈黙を呼んだ。来年——自分は生きていられるだろうか？ その問いが冷たい刃のように胸に突き刺さる。それでも、櫻華は顔に出さずに微笑む。「うん、そうだね」と返事をした。

チャイムが鳴ると同時に、美羽が「あ、トイレ行ってくる」と席を立ち、櫻華はひとり廊下を歩き始める。すると、後ろから聞き慣れた声が出た。

「蔵内……、ちょっといいか？」

振り返ると、吉野京一が手元のプリントを揺らしながら、声をかけてくる。「この前、和歌を教えるって言っただろう。……放課後、古文準備室に来るか？ 別に強制じゃないけど」

その言葉に、櫻華の心臓がどくんと跳ねる。うれしさと同時に、病院での父の言葉が脳裏をかすめる。“教師と生徒”、問題を起こしてはいけない、でも——。けれど、櫻華は迷いながらも、思い切って笑みを浮かべた。

「はい、ぜひ。……体調は大丈夫なんで、行きたいです」

京一は少しほっとしたように頷き、「じゃあ、またあとで」と言い残して足早に去っていく。その背中を見送る櫻華の胸には、どうしてもなく温かなものが広がっていた。

(やっぱり、先生に教わりたい。……もっと、古文も、先生のことも)

一方、そのやりとりを遠目に見つめていた人物がいた。視線の持ち主は、数学教師・若松理香。廊下の端に立ち尽くし、京一と櫻華の様子を見守っている。彼女の瞳には、自分でも拭いがたい戸惑いと不安がにじんでいた。

(吉野先生……あんなに冷えた瞳をしていたのに、あの子と話すときだけは、少し違う表情を見せるのね)

理香は唇を噛み、視線を床に落とす。若くして弟を亡くした過去を思うと、命が儂いことなど痛いほど知っている。だからこそ、今にも壊れそうに見える櫻華の姿が気になるし、そんな彼女に寄り添おうとする京一にも目が離せない。その気持ちは、どこか切ない嫉妬に似た感情へと変わりかけているのだと、理香自身も薄々悟っていた。

## 第四章 混ざり合う思惑、揺れる桜の残り香

### 1. 不意の来訪者

昼下がりの聖南学院高校。静かな校舎の廊下を、ひとりの男性が落ち着かない足取りで歩いていた。

蔵内一徳(くらうち かずのり)——櫻華の父である。スーツ姿に慣れないネクタイを締め直しながら、「職員室はこの先か」と何度もあたりを見回す。

日頃は滅多に学校に来る機会のない一徳だが、娘の体調悪化とその心情の変化を考えると、いてもたってもいられずに足を運んだ。

受付を済ませると、学校のスタッフから「担任は職員室かもしれないが、教頭室に通す」と案内された。一徳が重い気分で廊下を進むと、校内を巡回していた吉野京一本人がいた。

「吉野先生、ですよ。あ、あの……蔵内櫻華の父です」

名乗った一徳に、京一の表情が一瞬で固まる。まさか、櫻華の父が突然訪ねてくるとは思っていなかったのだろう。

「はい……いつも娘がお世話になっています」

そう言った一徳の声は、少し上ずっている。学校の規律や世間体を考えれば、教師と生徒の距離を安易に縮めてはいけない。それは十分承知している。だが、一徳の中にはもっと切実な思いがあった。

「話があるんです。できれば、少し時間をいただけますか」

京一は戸惑いつつも、頷くしかなかった。廊下を通りかかった石川教頭が「おや、蔵内さんですね。どうぞこちらの応接室へ」と促し、二人は簡素な応接セットが置かれた小部屋へ通される。

コーヒーを出して少し怪訝な表情を残し去っていく石川教頭の背中を見送りながら、一徳はうつむきがちに、拳を握りしめた。

「吉野先生……娘がいつも楽しそうに先生の話をしていまして。本当に感謝しています。病気でつらいことが多いあいつが、学校に行くのを喜ぶなんて久しぶりで……」

「いえ、僕は大事なことは何も——」

京一がそう言いかけた瞬間、一徳はすっと身を乗り出す。腰を折るように頭を下げるその姿勢は、父親の必死さを物語っていた。

「先生、娘を……どうかよろしく願います。あいつは先天性な心臓の病気で、先のことを考えると……どれくらい生きられるか、本人にも僕らにも分からないんです」

声が震えていた。一徳の言葉の端々には、親としての苦悩と祈りが滲み出ている。

「できるなら、娘の寿命が尽きるそのときまで、少しでも笑っていてほしい。あんなに嬉しそうに先生を慕っている娘の姿を見ていると、親としては奇跡のようなんです。だから……」

京一は喉が詰まるような感覚を覚えた。かつて、自分が守れなかった人がいた。その人もまた、先天性な心臓疾患を抱えていた。桜子の記憶が不意に押し寄せ、胸を苦しめる。

一徳はさらに声を落とし、言葉を続ける。

「もし、娘が最後まで高校生活を送ることができたら……いや、あいつが無事に卒業できるほど生きられたら、どうか嫁にもらっていただけませんか」

「——っ」

一気に咳き込むように息を呑む京一。まさか、そんな申し出をされるとは想像もしなかった。教師と生徒、しかも十数歳も年が離れている。社会的にも問題は大きい。

だが、一徳の瞳は真剣だった。娘がいつ死んでしまうか分からないからこそ、“今”しかない。娘が本気で想う相手がいるなら、それを全力で支えたい。その悲痛な思いが伝わってくる。

「すみません、無茶な話だと分かっています。でも、それほど娘を……桜華を愛しているんです。娘が望む幸せを叶えてやりたい。だから……」

頭を下げる一徳に、京一はしばらく声が出ない。桜子を救えなかった自分が、今また同じ苦しみを抱える少女に寄り添うことなど許されるのか。

戸惑いと混乱が入り混じる中、扉がかさりと開く音がした。

「失礼します。教頭に呼ばれ——」

若松理香が現れ、応接室の様子を目にして動揺する。一徳が深々と頭を下げ、京一が力なく言葉を失っている——普通ではない空気がそこには漂っていた。

## 2. 夕焼けに燃える校庭

やがて一徳が帰り、京一は授業を終えた後も茫然としていた。応接室での会話は、現実感が薄いまま彼の心に重くのしかかっている。  
(卒業まで生きられたら、嫁にもらってほしい……僕に、そんな資格があるのだろうか)

校庭の桜はすっかり散り、花びらの名残が地面にわずかに貼りついている。新緑の芽が目立ち始めた枝が、夕陽に染まり、また別の季節を予感させる。

京一は無意識のうちに、その桜の樹の下へ足を運んでいた。

「先生……」

か細い声が背後から響く。振り向けば、そこには蔵内櫻華が立っていた。制服のリボンをゆるめ、少し疲れたような表情だが、瞳だけはまっすぐ京一を見ている。

「……お父さんが来てたの、知ってます。先生に無茶なことをお願いしたんですよね？すみません……」

櫻華は気まずそうに視線を落とす。聞けば、一徳は櫻華に何も言わずに勝手に学校へ来たらしい。

京一は何とか落ち着いた声を出そうとするが、自分の心臓が妙に早鐘を打っているのを感じる。

「君が謝ることじゃないよ。……ただ驚いた。父親から、直接そういう話をされるなんて、僕も想像していなかった」

花びらがほとんど消えた枝先を見上げながら、京一は言葉を継ぐ。「まあ、教師と生徒だし……そんなの、簡単には受け入れられない話だ」

「……はい。わかっています。でも……」

櫻華は拳をぎゅっと握る。その横顔は、歯を食いしばるように震えていた。

「私だって、先生に迷惑をかけることになるのは分かっています。でも、私……先生を好きになってもいいですか？」

その問いかけは、あまりに無防備で、あまりに切実だった。教師と生徒という枠を越えた想いを宣言するには、若すぎるかもしれない。だが、その分だけ純粹で、嘘偽りが無い。

桜子を失ったときの記憶が、京一の胸を刺す。あのときも、もっと早くお互いの気持ちを確かめ合っていたら……何かが変わったのではないか——そんな後悔が蘇る。

「……君はまだ、16歳で」

京一は口の中で言葉を噛みしめる。

「人生だって、これからじゃないか。もっといろんなことを経験して、自分のやりたいことを見つけて……」

「やりたいこと……私には、そんなに時間があるかどうか分からないんです」  
遮るようにして櫻華が呟いた。その言葉は、残酷なほどの現実を突きつける。君はまだ若い、これからだ……と言われても、彼女にはその先の未来が約束されていないかもしれない。

そして京一も、かつてその事実を桜子とともに突きつけられたのだ。

沈黙が降りる。夕日の光が横から伸び、二人の足元を長く引き延ばしていた。  
ふと、櫻華が一步、京一に近寄る。視線が絡み合い、京一はわずかに後ずさりしかけるが、櫻華の瞳は強い意志を宿していた。

「先生、私ね……あとどれくらい生きられるかなんて分からないけど、今を無駄にしたくないんです。苦しいことばかりで、諦めるのはもう嫌なんです」

その小さな声は、折れそうできて、確かな光をはらんでいる。  
「だから、先生には“私はここにいる”って、伝えたくて。先生がどう思うかは分からないけど……後悔だけはしたくないから」

京一は胸の奥が大きくうねるのを感じた。桜子を失って以来、ずっと閉ざしていた感情が、痛みを伴いながらも溶け出してくるようだ。

一体、どうすればいいのか——答えが出せないまま、京一は小さく息をつく。

「……今は、答えは出せない。だけど……君が本気でそう思うなら、僕も逃げずに考えてみるよ」

この言葉は、曖昧な約束にすぎないかもしれない。それでも、櫻華の瞳から僅かな安堵の色が浮かぶのが見えた。

風が吹く。もう散り尽くしたと思っていた桜の枝から、小さな花びらが一枚だけくると宙を舞い、二人の間を滑り落ちていく。

まるで、最後の欠片が二人を繋ごうとしているかのように——京一はその儂い光景から目を離せなかった。

### 3. 波紋を広げる噂

翌日、校内では早くも噂が飛び交い始めていた。

「一年生の蔵内さんと古文の吉野先生が、よく一緒にいるらしい」「あの子、体が弱いから特別指導？」など、真偽不明の憶測が生徒や教師たちの間を駆け巡る。

学校の体面を何より重んじる石川教頭は、たちまち敏感に反応し、廊下で京一を呼び止める。

「吉野先生、ちょっといいですか。……最近、担任の蔵内さんと必要以上に親しくなっているという話を耳にしているんですが」

明らかに警戒を含んだ低い声。その背後には、若松理香の姿も見える。彼女は心配そうな眼差しを京一に向けていた。

「いや……彼女は病弱ですし、補習のような形で勉強を見ているだけです」

京一は落ち着いて答えようとするが、内心は冷や汗をかいている。昨晚、一徳から受けた“嫁にもらってほしい”という申し出など、到底学校には言えない話だ。

石川の目は厳しいまま、さらに問いただす。

「いいですか。理事長の息子であれども、教師と生徒の一線を越えるような行為は問題です。あなたにもわかっているはずですよ」

「……もちろん、承知しています」

そこへ理香がわずかに口を開く。「教頭、蔵内さんは確かに体調が悪いことが多いですし、吉野先生の補習を受けたいと言っていました。これ自体は違法でも何でも……」

石川は「それでも」と言葉を被せる。「学校全体の目があるんですよ。どこまで許容できるか、慎重になってくださいね」

そう吐き捨てるように告げると、石川は踵を返して歩き去っていった。理香は肩を落とし、京一に近づく。

「すみません、私が何も言わない方がよかったですよね……。でも、吉野先生が本当に勉強を見てあげてただけなら、それを証明したくて」

理香の声には自責の念が含まれる。彼女は弟を亡くした過去ゆえに、体の弱い生徒には強い同情を寄せているようだ。

しかし、その同情がただの“善意”だけではなく、京一への想いも複雑に絡んでいることを、理香自身も気づいているに違いない。

「いえ、ありがとうございます。僕のほうこそ、誤解を招かないように気をつけます」

理香はしばらく言葉を探すように視線をさまよわせるが、結局「はい……」とだけ答えて去って行った。その背中からは少し寂しげで、京一は胸に痛みを覚える。

#### 4. ひび割れた小さな世界

放課後、櫻華は校門近くで美羽と別れ、一人で帰宅しようとしていた。

玄関を出てすぐの場所には、もうすっかり葉桜になりかけた並木道がある。風にあおられる緑色の葉が、まるで季節を急かすように枝を揺らす。

櫻華はバッグを背負い直し、一歩足を踏み出そうとしたとき、視界がぐらりと揺れた。

「——っ、く……」

額に鈍い痛み。呼吸が苦しくなり、心臓が暴れるように脈打つ。いつもの発作が起こりかけているのを悟り、櫻華はその場に膝をついた。

周囲にいた生徒が「大丈夫!？」と駆け寄るが、櫻華は息を上手く整えられず、しゃがみ込むしかない。

(どうしよう、ここで倒れたら……)

焦りが募る。声を出そうにも喉が詰まるようだ。足元が霞んで視界が暗転しそうになるのを必死でこらえていると、聞き覚えのある声がした。

「蔵内さん! しっかり!」

駆け寄ってきたのは、若松理香だった。校舎から出たところを目撃したらしく、慌てて櫻華に肩を貸し、支えてくれる。

「大丈夫? 救急車を呼ぶ? 待ってて、職員室に——」

「い、いえ……少し休めば……」

息も絶え絶えにそう答えると、理香は困惑を浮かべながらも「じゃあ保健室に行きましょう」と、何とか櫻華を引き起こして歩かせる。

櫻華は理香の腕を頼りにしながら、どうにか意識を保つ。心臓が裂けそうなほど鼓動しているが、胸を押さえる手は震えをこらえている。

保健室に着くころには、息は少しずつ落ち着きを取り戻してきた。ベッドに横たわると、理香が汗をかいた櫻華の前髪をそっと撫でてくれる。

瞳の奥に浮かんでいるのは、まるで我が子や妹を気遣うような優しさと、切なさ——そして何か、別の感情。

「無理してない? 本当はもっと安静にしておかなきゃいけないんじゃないの? ……吉野先生との“補習”、あれも無理に参加してるんじゃないでしょうね」

理香の声には、どこか探るような響きが混じる。櫻華は小さく首を振る。

「無理なんかしてないです。むしろ、先生の授業があるから頑張れるんです」

そう言いきる櫻華の目は、はっきりとした決意を帯びている。しかし、その言葉に理香は微かな苦笑を浮かべるだけだった。

まるで、かつての自分を見ているかのような違和感——弟を失ったとき、自分は何ひとつできなかった。それが今も痛みとして胸に残っているのだ。

「……そう。あなたがそう思うなら、私が止めることもできないわね」  
理香はそう呟くと、保険医に声をかけて櫻華を任せようと立ち上がる。  
振り返ったその瞳には、一瞬にして複雑な色が揺れる。

「だけど、蔵内さん……吉野先生は、優しい人だけど、何か大きな悲しみを抱えているようにも見えるの。あなたも、自分の体で精一杯かもしれないのに、これ以上抱え込むのは無理しすぎないでね」

そんな忠告を残し、理香はカーテンを閉める。  
櫻華は目を伏せた。自分が支えられるわけでもない。ただ、先生のために何かできる気がするわけでもない。だけど、どうしようもなく“今”しかない時間を必死につかみたい——それだけだ。

胸の奥に残る不協和音に耐えながら、櫻華は保健室の天井を見つめる。散りきった桜の枝が、鮮やかなまま記憶に焼きついて離れない。すべては動き出したばかりなのに、なぜこんなにも苦しく、切ないのだろうか。

## 第五章 こぼれ落ちる歌、淡き光の行方

### 1. 夕闇の準備室

夜に近い薄暗さの放課後。古文準備室には一つの小さなスタンドライトだけが灯され、吉野京一はその下でプリントをまとめていた。

紙面には数首の和歌が印字されている。桜にまつわる歌はもちろん、小野小町や在原業平など、花の移ろいや命の儚さを詠んだものを中心に選んでいる。

ページをめくるたび、古来の詩情が胸をかきむしるように響いてきた。

「——かつ散る花を いかにとどめむ」

京一は声にならない息で、そう読み上げそうになって口を閉じる。満開の桜が、あっという間に散ってしまう情景を嘆く短歌。

いつか桜子と、その歌について話したことがあった気がする。けれど、記憶はぼんやりとしていて、はっきりとした声や表情は思い出せない。ただ、“散っていく儚さ”だけが、ずしりと心にのしかかる。

戸の向こうからノックが聞こえ、京一は慌てて資料を閉じた。

「——はい」

扉を開けたのは、蔵内櫻華だった。薄いスカーフのようなものを首元に巻いて、やや



息を切らしながら立っている。目元に微かな疲労がにじむが、その瞳は確固たる意志を湛えていた。

「来てくれたんだな。体調は……大丈夫？」

京一が立ち上がり椅子を勧める。櫻華は「少し保健室で休ませてもらったので平気です」と答え、かすかな笑みを浮かべる。

「ごめんなさい、放課後はあまり時間が取れなくて。でも、古文——特に和歌の話、もっと知りたくて……」

その視線は、押し殺した熱意を含んでいる。病弱な身体にもかかわらず、彼女がこうしてやってくるのは、“今を大切にしたい”という強い思いがあるからだろう。京一はその純粹さに、胸がまた締めつけられる。

「いいよ。ちょうどいくつか用意していたんだ。……あまり遅くならないように、軽く話をするだけにしよう。約束だ」

「はい」と頷きながら、櫻華は京一の指さす席に座る。そこに広げられたプリントには、有名な桜の歌や、小野小町の歌が並んでいた。

## 2. こぼれ落ちた古文

「まずは、この歌を見てみようか」

京一はプリントを一枚選び、声を落として読み上げる。

花の色は うつりにけりな いたづらに  
わが身世にふる ながめせしまに  
(小野小町)

「……小野小町の有名な歌ですね」と櫻華が呟く。その言葉には少し切なさが混じっていた。

「これ、百人一首にも収録されている有名歌ですよ。‘花の色はすっかり移り変わってしまった……’って、散りゆく桜のように、自分の美しさや青春も失われていくって意味、ですよ」

自分の命もまた、散りゆく花のように短いかもしれない——そう思うと、櫻華は自然と息苦しさを覚える。それでも、口には出さない。京一もまた、その心情に気づいているかのように、目を伏せたままだった。

「そう。小町の歌は、一見すると‘見た目の美しさ’の喪失を嘆いているだけにも見えるけれど、実はもっと深い意味があると思う。花や月といった自然を見ながら、‘もう戻らない時’を惜しむという……」

言葉を紡ぐ京一の声には、彼自身の想いにもじんんでいた。もう戻らない時間——桜子との時間。そして、櫻華の時間も、決して長くはないかもしれない。

「……先生、すみません。私、最近、桜のことばかり考えてしまって。もう散っちゃったんですけどね、学校の桜……」

櫻華の声は、不安と焦燥の狭間を行き来しているように震える。

「私、散りゆく花を見ると、どうしてこんなに胸が痛くなるのか、自分でもわからなくて。だから、こういう歌を見ると……妙に心が締めつけられるんです」

京一はゆっくりと頷く。桜子を亡くしたときの痛みが、自分の胸を今も焼き付けて離れないのと、どこか似ている。

「花はまた来年咲く。でも、今年の花はもう戻らない。それが桜の一つの象徴なんだろうな。……だからこそ儂いし、美しい」

視線を交わす二人の間に、かすかな暗さと、それを照らすような優しさが混在する。

櫻華がそっとプリントをめくると、もう一首の歌が出てきた。そこには、京一が手書きした注釈がある。

世の中に たえて桜の なかりせば  
春の心は のどけからまし  
(在原業平)

「‘もし世の中に桜がなかったら、春はもっと穏やかな気持ちで過ごせるのに’ って歌……ですよ」

「そう。桜の美しさと同時に、散ることへの苦しさを嘆いている。……僕にとっても、桜はいつも複雑な花だよ」

少しだけ笑いながら、京一が言う。桜を見るたびに、桜子の死を思い出すという彼のトラウマ。櫻華はそっとその横顔を見つめた。

「——先生は、どうして桜が苦しいんですか？」

踏み込んだ問いかけ。それを言葉にした瞬間、櫻華自身も少し後悔する。教師として、プライベートな事情を話すのは重荷になるだろうし、何より桜子の存在は京一にとって消えない傷だ。

だが、京一はほんのかすかな苦笑を浮かべる。

「……昔ね。春山桜子っていう、少し君と似た名前の幼なじみがね、心臓の病気で倒れてそのまま亡くなったんだ……その時、桜が舞い散っていた……」

遠い目をして、独り言のようにぼつりとそれだけ言って、京一は視線を机上のプリントへ戻す。桜の花びらのように、思い出は儂く散ってしまったかもしれないが、その痕跡は消えずに心の奥底に存在している。

### 3. 予期せぬ妨害

短い“個別指導”を終え、櫻華が廊下へ出ようとしたとき、勢いよく扉が開いた。そこに立っていたのは石川教頭だ。

「吉野先生、蔵内さん。こんな時間まで何を——」

低く咎めるような声。視線は厳しく、まるで証拠を押さえようとしているかのようだ。「教頭……。いえ、少し古典の補習をしていただけで」

京一は苦しげに弁明をする。櫻華は「すみません」と言いながら頭を下げた。

「しかし、私が先日申し上げたばかりですよ。生徒と教師の個人的な接触は、学校の品位に関わるんです。補習なら公に希望を出して、他の生徒を交えて行うべきでしょう」

石川の言うことも一理ある。けれど、櫻華は自分の病状を周囲に知られたくないという思いもあり、教師とマンツーマンで“休みがちの部分を補う”という形を取りたかった。

だがそんな事情を無視するように、石川はさらに声を強める。

「そもそも、あなたが担当しているのは一年生だけじゃない。手のかかる生徒は一人ではないでしょう。蔵内さんだけ特別扱いするのは不公平ですよ」

櫻華は唇を噛み、何も言い返せない。特別扱い——それは否定できない現実かもしれない。けれど、健康な生徒と同じペースでは到底追いつけないのだ。

石川は京一を鋭くにらんで言葉を続ける。

「理事長の息子だからといって、勝手に許されるわけではありません。今後、蔵内さんへの個別補習は慎重に考えてもらいます。いいですね？」

「……承知しました」

京一は短く答えるしかなかった。石川の背後には若松理香も立ち尽くしている。理香は何か言いたそうに目を伏せながら、石川の背に従うようにその場を後にする。

残された櫻華は、肩を落として小さく震えていた。

「……ごめんなさい、私のせいで。やっぱり、先生を困らせてしまってるんだ……」

そうつぶやく櫻華の瞳には涙がうっすらと宿っている。

「いや、僕がうまく説明できなっただけだよ。気にしなくていい」

京一はそう言うが、教頭の態度は明らかに警戒心を増しているのがわかる。周囲の誤解を解くには、どう行動すればいいのか、まるで糸口が見えない。

ちょうどそのとき、櫻華のスマートフォンが振動した。着信画面を覗くと、“父”の文字。いつもより早い時間に迎えに来たのかもしれない。

櫻華は急いで通話ボタンを押し、小声でやりとりをする。京一は少し距離を置きながら、その横顔を窺う。すると、みるみるうちに櫻華の表情がこわばった。

「……うん、わかった。すぐ行くね」

そう言って切ると、櫻華は京一の方に向き直る。唇をきつく結んだまま、動揺を押し殺すように息を飲んでいる。

「どうかしたのか？ 具合悪くなったとか……」

「……主治医の先生から連絡があって、移植手術の候補者が見つかったかもしれないって……」

その言葉に、京一の胸も大きく揺れる。

櫻華は微妙な笑みを浮かべるが、その笑みは喜びではなく、不安と混乱が半分を占めているように見えた。

「確定じゃないし、すぐに手術できるかもわからないけど、念のため病院に来てって言われて……。あんなに待ち望んでたはずなのに、どうして胸がざわざわするのか自分でもわかりません」

限りある命をつなぐためには、誰かの命を分け与えてもらう——それが移植という現実。

櫻華の目には、かすかな涙が浮かんでいた。喜びでもなく、悲しみだけでもなく、複雑な感情が交錯している。

「とにかく、父が迎えに来るので失礼します。……先生、また、話を聞いてくださいね」

そう言い残し、櫻華は足早に去っていく。京一はその後ろ姿を見送るしかなかった。廊下にこだまする静寂が、やけに冷たく感じられる。

(もし、移植が本決まりになったら——彼女は命を繋ぐかもしれない。それでも、その先に待ち受けているものは何なのか)

想いは千々に乱れ、答えは何一つ見つからない。机の上に残された和歌のプリントだけが、薄暗い準備室の明かりに照らされて、静かに佇んでいた。

#### 4. それぞれの祈り

夕暮れの病院。ロビーには灯りがともし、薄暗い外の景色を背景に、行き交う医療スタッフや患者の姿が目立つ。

蔵内櫻華は父の運転する車で病院へ来ると、すぐに主治医の佐伯に呼ばれた。診察室の白い壁は相変わらず無機質で、櫻華の胸の動悸を余計に強める。

「……まだ確定ではないんです。でも、適合する可能性があるドナーが出たと連絡がありました。検査次第では手術の準備をしなければならない」

佐伯医師は淡々と語るが、その眼差しの奥にはかつて娘を失った人特有の深い優しさと悲しみが共存している。櫻華は複雑な気持ちで視線を落とした。

誰かが亡くなって、自分が生き延びるかもしれない。

待ち望んできたはずなのに、そう思うとやはり胸が苦しくなる。両親の嬉しそうな眼差しを見ていると、自分だけがこんな感情を抱いていることが罪のようにも感じられた。

「ごめん……ごめんね」

母・志穂は涙ぐみながら、櫻華の手を握りしめている。父・一徳も「神様が、きっと娘を見放さなかったんだ」と震える声で言葉をこぼした。

櫻華は静かに首を振る。心臓移植のチャンスが巡ってきても、それは誰かの死を前提にした希望だ。だから、心の底から喜べない自分がいる。

(先生は、このことをどう思うだろう……)

思考がふと、吉野京一へ向かう。学校で知り合ってからそんなに時間が経っているわけじゃないのに、彼は自分の心に大きな場所を占めるようになっていた。

もし自分が移植をして生き延びたら、先生は喜んでくれるだろうか——そんな問いが頭をぐるぐると回る。

一方、その夜。

自室で机に向かう京一は、手を止めたまま、窓の外を眺めていた。先ほどの櫻華の表情がどうしても頭から離れない。

電気スタンドの下には、歴史的仮名遣いが記された百人一首の冊子が開いたままだ。風がページをめくり、ある一首の文字が浮かび上がる。

ひさかたの ひかりのどけき春の日に

しづ心なく 花の散るらむ

(紀友則)

春の日差しは穏やかでも、花は散る。どうしても、落ち着かずに花びらは舞い散ってしまう。

桜子が最後に口にした歌でもあった。それが今、櫻華の姿と重なり、胸を強く締めつける。

「花が散るように、人の命もいつかは終わる。……でも、それでも、君は生きたいんだよな」

誰にともなく呟く声が虚空に落ちる。もし、あのとき自分が桜子を救えたなら——もし、ドナーが見つかったなら——と、過去に幾度も願ったことが脳裏をよぎる。

自分は何もできなかった。ならば、今回こそは“誰か”を救うことができるだろうか。いや、教師として何をすればいいのかすら、まだ見当もつかない。

想いは、尽きない。

桜が散る季節を過ぎても、桜子への悔恨と、櫻華への不安とが交錯して、京一の心を乱し続ける。窓の外は夜の闇に覆われ、遠くに見える街灯の光が滲んでいる。

その光景はまるで、これから訪れる嵐の前の静寂を思わせた。

## 第六章 散り急ぐ風、刻まれた願い

### 1. 理事長室の重苦しい空気

朝のホームルームが終わると同時に、吉野京一は石川教頭に呼び出され、母・吉野理恵が執務する理事長室へと足を運んだ。

木目調の重厚な扉を開けると、広いデスクの奥に座る理事長が、いつになく陰しい表情で書類を見つめている。石川教頭はその隣で小声で何かを囁き、京一の姿を認めると眉をひそめた。

「お母さん……理事長。僕を呼んだの？」

京一がそう切り出すと、理事長である吉野理恵は書類を脇に置いて、ゆっくりと息をつく。

「ええ。学校の風紀や規律をめぐって、生徒と教師の距離感が問題になりつつあると聞いたの。特に、あなたと蔵内櫻華さんとの関係についてね」

すでに教頭から状況を聞かされているのだろう。京一は心のどこかで予想していた。

「補習の名目で放課後に二人きりになるのは、誤解を招きやすい。最近は学内で噂が広がり始めているし、万が一、外部に漏れたらどうなるか考えてみてほしいわ」

母の言葉はあくまで理事長としての立場を貫くものだ。親子という私情を挟む余地は感じられない。しかし、京一は言い返すことができないまま、唇を結んだ。

石川教頭が横から追い打ちをかける。

「吉野先生、あなたにも事情があるのかもしれませんが、生徒の特別扱いを続けるのは難しいでしょう。特に一年生は例外を許すと他の保護者からも疑念を抱かれます」

「わかっています。しかし、蔵内さんは体調が安定しにくい。だからこそ勉強の遅れを取り戻すには……」

「他の方法を考えてください。それこそ、複数の教師やクラスメイトも一緒にする『補講』に変えるとか、保護者の理解を得たうえで正式にカリキュラムを組むとか。二人きりでやる必要はない」

母・理恵も静かに頷く。

「あなたは、この学校の先生である前に、私の息子という目で見られがち。そんな中で、個人的な行動が取り沙汰されるのは得策じゃないわ。……わかるわね、京一」

理事長としてではなく、母親としての声色がかすかに混じっている。それでも、そこには厳然たる学校運営の責任者の態度があった。

京一は居たたまれない気持ちで俯き、「検討してみます……」と答えるしかなかった。外には雨が降り始めたらしく、窓ガラスに小さな粒が打ちつけている音が聞こえる。

## 2. 国文学者の父を訪ねて

その日の放課後、京一は思い切って実家へ向かった。理事長である母は学校に残業で遅くなるという。だからこそ、久々に父の顔が見たかった。

吉野宗一郎(よしの そういちろう)は大学で国文学を教える教授。京一が古文に興味を持つきっかけを作った人物でもある。夕方ごろには研究室から自宅へ戻るらしく、京一は玄関を開けると、ちょうど父が書斎から出てきたところだった。

「おお、京一。珍しいな、こんな時間に来るなんて」

宗一郎は銀縁の眼鏡を外しながら、息子を迎える。柔和な顔立ちの中にも、どこか研究者らしい知的な雰囲気がある。

リビングのテーブルに向かい合って腰を下ろすと、京一は正直に打ち明けた。学校で起きている問題、生徒・櫻華の病気、そして櫻華の父・一徳から受けた衝撃的な頼み——。

「……なるほどね。教師と生徒という立場を越えた縁を求めるのは、確かに普通じゃない。けれど、そのお父さんとやらは、必死なんだろうなあ」

宗一郎は腕を組み、遠い目をする。

「かつてお前が部屋に閉じこもったとき、お父さんもどうすればいいのかわからず必死だった。奈良に連れ出して古文を教えたり、ドナー登録を勧めたり……そうするしかなかったんだよ」

京一は思わず背筋を伸ばす。桜子の死後、自分が落ち込んでいたときのことを思い出した。父は知識や旅行を通じて、京一の気持ちを少しでも救おうとしてくれたのだ。その父が続ける言葉には、一層の重みが宿る。

「なあ、京一。桜という花は、どうしてこんなにも人の心を揺さぶると思う？」  
「……儚さ、ですかね。咲いている期間が短くて、すぐ散ってしまう」  
「そうだ。だからこそ、人はそこに愛しさと切なさを感じる。‘今年の桜を見逃したら、二度と同じ景色は見られない’ とね。そして、その景色が失われるとき、人は強い痛みを覚えるんだろう」

宗一郎はテーブルの上にあった一冊の和歌集を手取る。ぱらりと開いたページに目を落とすと、優しい声で読み上げる。

あだし世を いかにかすべき 桜花  
散るといふことは なにとしもなし  
(『古今集』より)

「‘この儚い世の中を、どうしてしのいでいけばいいのだろう。桜の花が散ると聞いたって、どうということはないじゃないか——’ そんな歌だ。……桜が散ることは悲しみの象徴でもあるが、同時に‘覚悟’を促すものでもある。限りあるものだからこそ、美しさを感じられるのかもしれないな」

京一は黙って父の言葉を聞く。桜子が亡くなって以来、桜を見るたびに痛みを襲われてきたが、今はまた別の視点を与えられている気がする。ふと、父が眼鏡を少し持ち上げ、「お前、最近は何の具合はどうなんだ？」と声を潜めて尋ねてきた。

「え……いや、特に悪くはないと思うけど」  
「そうか。ならいいんだが、何か悩みがあったらいつでも言えよ。……お母さんは厳しいところもあるが、お前のことを大切に思っている。そのことは忘れないでやってくれ」

宗一郎の視線には、どこか言いづらそうな色が浮かぶ。京一が「わかった」と答えると、父はすっと微笑みを返した。

この家には、温かい家族の気配が確かにある。しかし、桜子の死や“理事長の息子”という重圧が、京一の心に深い影を落としているのも事実だ。

### 3. 報せ

翌日、昼休みの校舎。蔵内櫻華が病院から戻ると、美羽が「大丈夫なの？ 検査ってどうだったの？」と駆け寄ってきた。



櫻華はうつむき加減で小さく息をつく。「まだ、確定じゃなくて……。ドナーの状態とか、詳しい適合検査があるみたい。すぐに手術ってわけでもないみたいなの」

「そっか。早とちりして‘手術決まった！?’とか思っちゃったけど、そんなに簡単には行かないのね……」

美羽は申し訳なさそうに眉を寄せる。櫻華は「うん」とほほ笑みを返すが、その笑みにはどこかやりきれない疲れがにじんでいる。

「……大丈夫。期待してダメだったときの方が落ち込みそうだから、あまり浮かれないうようにしてるだけ。……でも、なんかモヤモヤするんだ」

言葉にしづらい気持ちが胸に鬱積している。それは、誰かが死ぬことで自分が生き延びるかもしれないという申し訳なさ、移植のチャンスが訪れるかもしれない期待が混じり合った、複雑な感情だった。

廊下の窓から外を見下ろすと、しとしとと降り続く雨が中庭を濡らしている。桜の枝は葉を青々と広げ、春から初夏へと移ろう気配が漂う。櫻華の瞳には、その光景がどこか遠い世界のように映るだけだ。

「ねえ、先生には……そのこと、もう伝えたの？」

美羽が声を潜めて尋ねる。櫻華は首を左右に振る。

「まだちゃんと話してない。病院行くとって言っただけ……。でも、先生もいろいろ大変みたいで……。教頭がうるさく言ってるでしょ？ それに、先生のお母さんが理事長だし……」

櫻華は思わず苦笑する。恋人になるとか、結婚するとか、そういった現実には遠い夢のように感じられる。自分には時間が少ないかもしれないし、相手は教師としての立場がある。

それでも、何か一つでも通じあえるものがほしい——櫻華の胸にはそんな渴望がくすぶり続けていた。

#### 4. 雨上がりの校庭、再び

放課後、降り続いていた雨がやみ、空には薄い雲の切れ間から夕日が差し込み始めていた。地面はまだ濡れていて、ところどころに水たまりができています。

櫻華が昇降口で靴を履き替えていると、視界の端に吉野京一の姿が映った。声をかけようか迷っていると、ちょうど京一が気づいて近づいてきた。

「……顔色、少し悪いぞ。今日、病院だったんだって？」

京一の言葉は優しいが、その瞳にはどこか不安が宿っている。あの日、理事長室で

釘を刺されてから、京一は櫻華との接触を慎重にしているように見えた。  
櫻華はバッグの紐を握り締めながら、小さく微笑む。

「うん、でもすぐに手術って話でもなくて……。先生にも、いろいろ迷惑かけちゃうし、話すのをためらってたの。ごめんなさい」  
「謝ることじゃない。気になることがあれば、いつでも言ってくれればいい。俺は……いや、私は君の担任だし、頼ってもらってかまわない」

ふいに「俺は」と言いかけて修正するところに、京一の躊躇いが透けて見える。教師としての理性と、桜子の面影がちらつく感情、その二つの間で葛藤しているのだろう。  
櫻華は「ありがとう」とだけ答え、下を向いた。その沈黙が痛いほどに切なく、京一が目を伏せかけた瞬間、何やら慌てた足音が近づいてくる。

「先生、蔵内さん、大変！」  
息を切らしたのは松本美羽。顔色を青ざめ、何かを伝えに来た様子だ。  
「保健室の先生が、若松理香先生が倒れたかもしれないって……！」

「え……若松先生が……？」  
京一は驚き、櫻華と顔を見合わせる。理香は数学教師として同僚であり、京一のことを何かと気遣ってくれていた存在だ。  
櫻華は曖昧な不安を抱えながらも、「行きましょう！」と声を張り、京一とともに校舎の中へ駆け戻った。

## 5. 余波、そして記憶のきざし

理香が倒れていたのは、職員用のロッカールームだった。校内巡視を終えたあと、急に眩暈を起こしたらしい。保健室から駆けつけた保険医が応急処置を施し、理香はどうか意識を保っていた。

京一が駆け込むと、ロッカーに背を預けて座り込む理香の顔は、どこか力ない笑みを浮かべている。

「若松先生、大丈夫ですか……」  
「ごめんね、吉野先生……。ちょっと立ちくらみがひどかっただけで……」  
理香は弱々しい声で答えるが、その瞳は遠い過去を思い出しているかのようににじんでいる。弟を亡くしたトラウマを抱える彼女にとって、体調を崩すたびにあの記憶が蘇るのだろうか。

「無理はしないでください。保健室で少し休んだらどうですか？」  
京一がそう言うと、理香は首を振って「もう大丈夫」と呟く。だが、汗ばんだ額と震え

る唇は明らかに限界を物語っている。

櫻華も心配そうに見つめていたが、自分も体が弱いだけに、どう声をかけるべきか分からない。

「若松先生、いつも自分のことは後回しにして、周りを優先しちゃうから……」

思わず出てしまった言葉に理香は薄く笑う。「そうかもね。私ってそういう性格、変わらないんだ」

まるで自嘲するような口調だったが、そこには弟を守れなかった悔恨が色濃く刻まれているようにも感じられた。

「……なんだか、ほんと、みんなギリギリなんだね」

ぽつりとつぶやいたのは櫻華だ。彼女自身も体調が安定せず、移植をめぐる葛藤を抱え、京一もまた過去のトラウマと教師としての立場を背負う。そして理香も、亡き弟の影に囚われている——誰もが何かしら大きな痛みを抱えているように思えた。

夕闇が忍び寄る校内で、理香は保険医に付き添われて、静かに保健室へ運ばれていく。京一と櫻華はその場に残り、互いに言葉を見つけれずにいた。

外では雨雲が切れ、夕日が一瞬だけ校舎の窓を染めている。金色に濡れた光が、廊下をほんのわずかに照らした。

そのとき、櫻華の頭の片隅に、ふと既視感のような感覚がよぎった。

——夕日、桜の木、誰かが倒れる——。ぼんやりとした断片的な記憶。けれど、その正体はまだ霧がかかったまま、手探りの中で見え隠れするだけだった。

## 第七章 断片がつむぐ記憶、宿命の軌跡

### 1. 夜明けの悪夢

深夜、蔵内櫻華は突き刺すような心臓の痛みを襲われて、ベッドの上で荒い息をついた。

時計の針は午前二時を回ったところ。まだ外は暗く、窓から差し込む街灯の光が、ぼんやりと部屋の空気を照らしている。

パジャマの胸元を握りしめながら、櫻華は自分を落ち着かせようと呼吸を整える。すぐに母が心配して部屋を訪ねてきそうなので、できるだけ大きな声は出せない。

(今は……夢？ それとも記憶？)

先ほどまで櫻華の脳裏を支配していたのは、鮮明なイメージだった。

——まるで、自分が中学二年生のとき。満開の桜の下で、誰かと帰宅していた。そ

して、桜の花びらが舞う中、突然視界が揺れて地面に倒れこむ。必死に名を呼ぶ少年の声……。 「吉野京一」という響きが、苦しさとともに頭を駆け巡っていた。

櫻華はうっすら汗をかいた額を拭い、枕元のテーブルランプを点ける。  
(どうして、京一先生が“少年”の姿で出てきたんだろう……。まるで、昔から知っているような感覚……)

ここ数週間、似たような夢を繰り返し見ている。ときには倒れ込む自分の傍で、京一が泣き叫んでいる光景もあった。

現実では、京一は十数年も前に“桜子”という幼馴染を亡くしている。櫻華はその名を、ふと口にしてしまいそうになるほど、はっきりと「桜子」の存在を感じ取っていた。

——けれど、どうして？ 自分は蔵内櫻華であって、春山桜子なんかじゃないはずなのに……。

胸の痛みが少し落ち着いてきた頃、携帯電話が微かに振動した。友人の松本美羽からのメッセージだ。夜更けに何事かと思い画面を開くと、「眠れないから適当に起きてたら、あんたのことが気になって……」と書かれている。

「寝てるかもだけど、無理しないでね。今日も朝から病院行くんだよね？ 検査、頑張ってる」

櫻華は思わず小さく笑う。夜中にこんな LINE を送ってくる美羽の気遣いが、ありがたくも切ない。どこか夢見がちな自分と違って、現実的に物事を見てくれる親友の存在が救いだっただ。

少しだけ息を吐き、櫻華はスマホの画面を閉じる。そして、布団の中に身を沈めながら、頭を巡る疑問をもう一度噛みしめた。

(私、どうして京一先生が“桜子”を失った過去を、まるで自分のことみたいに感じるんだろう。……桜の花びらの夢を、ずっと見ている。)

静まり返った部屋の中で、櫻華の心臓がドクドクと鼓動を刻む。

その音に合わせるように、桜子の最後を看取った少年の姿が胸に浮かんで消えていく。そして、次第に櫻華の瞳は重くなり、再び浅い眠りへと落ちていった。

## 2. 病院での加速する違和感

翌日、午前中に病院を受診した櫻華は、点滴スタンドの車輪を引きずりながら廊下を歩いていた。今日は長めの検査があり、途中で点滴を入れられている。

父・一徳は職場へ戻り、母・志穂は院内の売店で飲み物を買って行った。少しの間、櫻華は一人きりだ。

消毒液の匂いが漂う無機質な空間の中、櫻華は目の前にある面会スペースに視線を向ける。そこには、病院の廊下を見下ろす大きな窓があり、天気の良い日には遠くまで見渡せる。

(あの夢の続きを、見られたら何かがわかるのかな。……京一先生が、中学二年の頃の幼馴染を失ったってことは知っている。でも、それをどうしてこんなにも“自分のこと”みたいに思うの?)

遠くに目をやると、病院の裏手には小さな公園が見える。子どもの姿が何人かはしゃいでいるのを捉えた瞬間、また頭の中で何かが弾ける感覚がした。

——春の日差し、川沿いの道、そして桜吹雪の中で崩れ落ちる身体……。一瞬だけ視界がチカチカと霞み、櫻華は慌てて壁に手をついた。

「だ、大丈夫ですか？」

突然現れた声に、櫻華ははっと顔を上げる。見ると、佐伯医師が心配そうな表情で声をかけていた。

「顔色がよくないけれど、痛みは出ていない？」

「あ、先生……はい、大丈夫です。ちょっと立ちくらみが……」

櫻華が笑顔を取り繕うと、佐伯はふうと安堵の息をつく。そして、柔らかい口調で告げる。

「検査結果はまだ何とも言えないけれど、ドナー候補の状況が少し変わったかもしれない。夕方には詳しい説明ができるから、そのときにご両親も交えて話しましょう」

「……変わった、って？」

「急にダメになる場合もあるし、逆にタイミングが合えば急に移植が進むかもしれない、ということだよ。覚悟も必要だけれど、悲観だけでもしてられない。僕としては、どんな形であれ最善を尽くしたい」

佐伯はそう言い残して去っていく。かつて娘を看病していたときの過ちを、今の櫻華に重ねているのだろう。

櫻華は点滴のポールを握りしめながら、再び窓の外を見下ろす。

(私の命は、誰かの死と引き換えに延びるかもしれない。……前世の私も、そうだったの?)

“前世”という単語が、櫻華の頭にしっかりとハマらないまま、胸にこみ上げる。不安と焦燥が縋い交ぜになって、喉が渇くような感覚を覚える。早く京一に会って、この胸のざわつきを打ち明けたい——そんな切なる思いがふっと生まれていた。

### 3. 桜子のノートと、微かな手がかり

一方、吉野京一は放課後の職員室で山積みになった書類を整理していた。教頭や理事長の指示もあって、余計な残業は避けるようにしているが、それでもやるべきことは多い。

ふと、机の引き出しに手を伸ばすと、そこには古びたノートが一冊挟まっていた。まだ大学生の頃、部屋を片付けていた母親が「これ、桜子ちゃんのものじゃない？」と渡してきたノート——桜子が中学時代に使っていたものらしいが、どうやって京一の手元に来たのかは今となってははっきり覚えていない。

表紙は少し擦り切れていて、「春山桜子」と小さな字でサインがある。開くこと自体、ためらっていたが、今はなぜかそのノートに触れたい衝動に駆られる。

ページをめくると、未熟な字で書かれた短歌のメモや、桜にまつわるイラストが残されていた。どれも中学二年生の少女が、授業で学んだり、あるいはふと書き留めたりしたものだろう。

「ひさかたの 光りのどけき春の日に……」

——京一くんが言っていた。本当はもっと桜をゆっくり見たいのに。

はっとして息を飲む。桜子が自分のことをどう思っていたのか、垣間見えるようで怖い。めくるほどに、切なくなる言葉が並んでいる。

だが、あるページの端に、小さく“いつかもう一度、春の日の桜を見に行きたい”と書き足してあるのを見つけたとき、胸が締めつけられる。

(桜子は……今どこにいる？ 本当に消えてしまったのか。それとも、何らかの形で生まれ変わっているのか……)

京一は首を振り、ノートを閉じた。こんなことを考えても、現実にはどうしようもない。ただ、最近の櫻華の瞳に、桜子の面影を感じる瞬間が増えているのは事実だ。

——まさか、そんなはずはない。

揺れる思考を押し殺すように、京一は書類整理を再開する。しかし、その気持ちはまるでどこか宙に浮いたままだった。

### 4. 電話越しの戸惑い

その夜、すべての検査を終えた櫻華は病院のベッドで安静にしていた。両親が帰宅した後、スマートフォンを手に取り、京一の連絡先を開く。

——連絡するか、やめるか。何度も指先が迷う。担当教師との個人的な連絡など、周囲が知れば問題になりかねない。それでも、今夜はどうしても話したい。

息を整えて、思い切ってメッセージを送る。「体調が少し悪くて今日は入院になりました。でも、大丈夫です。先生に……少し相談したいことがあります。もしご都合がよければ、電話かけてもいいですか？」

既読がつくまで、数分。まるで何十分にも感じるほど長い沈黙ののち、京一から「わかった。今なら大丈夫だよ」と返事が来た。

櫻華はドキドキしながら通話ボタンを押し、耳元にスマホを当てる。呼び出し音の末、京一の声が聞こえた。

「……大丈夫か？ どんな状態なんだ？」

低く抑えた声。学校にいるわけではないが、時間が遅いせいか、京一も誰かに聞かれないよう配慮しているのかもしれない。櫻華は病状について手短かに伝え、それからおそろおそろ切り出す。

「あの……実は、先生に聞きたいことがあって。前に、先生が桜子さんっていう女の子を亡くしたって話、聞きましたよね。……どうして私、先生のことや、その方のことをこんなに身近に感じるのか、ずっとわからなくて……」

一瞬、京一が息を飲む気配が伝わる。櫻華は胸の奥が強く締めつけられたような痛みを覚えつつ、言葉を続ける。

「私、最近、桜子さんと先生と一緒にいたような夢ばかり見るんです。桜の木の下で、先生が私の手を握っている夢。……どうしてだろうって、自分でも混乱してます」

京一は沈黙する。受話器越しの気まずい空気。櫻華は思い切って言葉を重ねる。「もしかしたら、私は桜子さんの生まれ変わりなんじゃないか……なんて、バカみたいだけど、そんなふうに思うんです。……でも、そんなこと、現実にはあり得ないですよ？」

返ってくる声は、意外なほど静かだった。

「……僕も、あり得ないと思ってた。だけど、君があまりにも桜子に似ているところがあって……。それを言葉にするのが怖かったんだ」

胸の鼓動が一気に速まる。京一が紡ぎ出す言葉は、自分の疑念を追認するかのよう響いてくる。

「桜子は、僕にとって大切な……初恋の人だった。あのとき、僕は何もできず、彼女を失った。だから、もし君が本当に……そんな奇跡みたいな存在だったら、僕はどうしたらいいんだろうって……」

声は震えているようだった。教師と生徒という立場を飛び越え、前世だの生まれ変わりだの、客観的には荒唐無稽な話だとわかっていながら、それでも二人の心を動かす何かが存在している。

櫻華は携帯を握る手に力を込める。今、自分が抱いている胸の痛みと、奇妙なほど強い安堵が混じり合う。

「ごめんなさい、先生……私、もう少しきちんと“思い出して”みようと思います。桜が散る夢の続きを。はっきりしたら、先生にちゃんと伝えたいから……」

「……わかった。無理はするなよ。体を大切にしてくれ」

通話が切れたあと、櫻華の胸には複雑な感情だけが残された。やはり、彼女の中には春山桜子としての記憶の断片がある。今はまだぼんやりしているが、時間をかけるごとに輪郭をはっきりさせているようだ。

(もし、本当に生まれ変わりだとしたら……私は今度こそ、先生を失いたくない。私が死ぬ前に、どうかもう一度想いを伝えたい)

そう願いながら、櫻華は小さく目を閉じた。

## 第八章 痛みに染まる桜、揺れる覚悟の先

### 1. 早春の雨上がり

天気予報が外れたのか、朝から細かな雨が降り続いていた。

翌日にかけては天気が回復するとアナウンスされ、ようやく昼過ぎには雲の切れ間から陽が射し始めた。校庭の桜は、若い葉を蓄え、初夏を迎える準備に入っている。

聖南学院高校の廊下を歩きながら、吉野京一はふと校庭に目をやった。花の名残と新緑の入り混じったその姿に、桜子を看取ったあの日の冷たい光景を重ねそうになるが、必死に意識を振り払う。

(あの日のまま止まってはられない。櫻華は、今、必死に生きようとしているんだから……)

そう自分に言い聞かせるように足を進めると、ちょうど数学教師の若松理香が向こうから歩いてくのが見えた。数日前に体調を崩して倒れたばかりだが、今日は少し顔色が良い。

理香は京一を見つけると、微笑みかけようとして戸惑った様子を見せる。とりあえず、軽く会釈をしてすれ違う。何かを言いかけた気配があったが、言葉を飲み込んでしまったようだ。

京一はその後ろ姿を目で追いながら、胸にわずかな痛みを感じる。きっと彼女に



は、伝えきれない何かがあるのだろう。弟を亡くした過去と、自分への想い——それが交差していることを、京一は薄々感じ取っていた。

(いま、僕が考えるべきは櫻華のことだ。彼女が桜子の生まれ変わりだとしても、そうでなくても……彼女が苦しむのを放っておけない。)

自分自身にそう言い聞かせるように、京一は職員室へと向かった。

## 2. 教頭のさらなる圧力

職員室では、石川教頭が何やら書類を睨みつけ、苛立ちを隠せない様子だ。京一がそばを通りかかると、待ち構えていたように声をかける。

「吉野先生。少し時間いいですか」

嫌な予感がして、京一は「はい」と短く答え、教頭の隣に立った。すると、石川教頭は声を低めながら言葉を続ける。

「蔵内さんの両親が、彼女の体調についていろいろと学校に意見してくるんですよ。“娘が病院通いで欠席や早退が多いが、学業を支援してほしい”とか、“もっと個別に柔軟な対応を”とかね。あなたが担任だからこそ、彼らは期待しているようですよ……」

それ自体は当たり前の要望のように思える。だが、石川の表情は陰しいままだ。「個別指導を行うには、公的な手続きや他の生徒とのバランスなど、クリアすべきことが山積みです。あなただけで引き受けるのは難しい。その点、ちゃんと理解してくださいね」

「わかりました。周囲の先生とも連携しつつ、正式な補講の形を検討します」

京一は頭を下げながら答える。教頭は少し肩の力を抜き、「頼みますよ。理事長もこの件には関心を持っていますから」と言い残して立ち去る。

——教師として当然のことを言われている。だが、櫻華が“桜子の生まれ変わり”らしき感覚を持っているなんて、もちろん教頭に言えるはずもない。京一はもどかしさを感じながら、己の机へと戻る。

(正式な補講を組むとなれば、櫻華の病状やプライベートが大っぴらになる。だけど、それを嫌がるのは彼女自身だろう……どうすればいい?)

書類に視線を落としながら、京一の思考はさらに暗い迷路を彷徨う。教師としての立場と、桜子を失った自分の想い、そして生まれ変わりかもしれない櫻華の存在が、一気に重くのしかかっていた。

### 3. 揺れる親友の胸中

放課後、櫻華は中庭のベンチに腰を下ろしていた。病院とのやり取りで授業にほとんど出られず、校内に残るのも久々だ。

すでに部活へ向かった生徒たちの声が遠くから聞こえ、少し寂しい雰囲気漂う。櫻華はその空気を感じながら、自分の鼓動を確かめるように胸に手を当てた。

「……今のところ、痛みはない。大丈夫……」

そう呟いたとき、背後から軽い足音が近づき、松本美羽の声が飛んできた。

「櫻華、まだ帰ってなかったんだね。調子はどう？」

親友の顔を見上げると、いつものようにあつけらかなとした表情だが、どこか心配気に眉を寄せている。櫻華は微笑もうとするが、それがうまくいかない。

「うん、今日のところは平気。ただ、病院に行くかどうか迷ってた……検査結果がまだはっきりしなくて……」

「そっか。もしかして、ドナーの話が進みそうなの？」

美羽が少し声をひそめる。櫻華は唇を引き結んでうつむく。移植が決まるかもしれないという話は、周囲に大っぴらに言えない。

少し沈黙が降りた後、美羽が言いにくそうに言葉を継ぐ。

「ねえ、櫻華。最近、先生との距離がすごく近いよね……。国語教師としての範疇を超えてる気がするっていうか。あたしは応援する気持ちだけど……正直、心配にもなるんだ」

「心配？」

「だって、先生は大人だし、学校という社会の中で立場もあるじゃない。もし何かあったら、櫻華が傷つくのは目に見えてるから……」

美羽の声には、かすかな震えが混ざっている。櫻華は彼女の言いたいことを理解できる。病気で体調の不安がある上に、教師と生徒の恋愛なんてややこすぎる話だ。

——それでも、自分に与えられた時間が限られている以上、躊躇している暇などない。そう思うと胸が痛む。

「ごめんね、美羽……。私、先生が好き。だけど、まだちゃんと言葉にできなくて。病気のこと、前世のこと——いや、生まれ変わりなんて普通は信じられないよね……」

櫻華は思わず口を噤む。「前世」については美羽に詳しく話していなかった。生まれ変わりなんて、突飛すぎて笑われるかもしれない。

美羽は少し首を傾げた。「前世……？ そんな話、いつの間に先生としたの？ なんだか余計に大丈夫か心配になるよ」

「大丈夫、きっと。……ごめん、うまく説明できなくて」

櫻華は不安げに笑う。頭の奥で、桜子の記憶がまだ断片的にかすめるだけで、はっきりとした形になっていない。

美羽は何も言わずに隣に腰を下ろし、櫻華の手を握った。しばらく沈黙が続き、夕暮れの薄い光が二人を照らす。

「……櫻華が決めたことなら、あたしは応援する。だけど、本当に辛くなったら、絶対に言いなよ。あんたが倒れたりしたら、一番困るのは先生だってこと、忘れないで」

その言葉に、櫻華は小さく頷く。ありがたい友情と、説明しきれないもどかしさが胸を満たし、今にも涙が出そうになるのを必死でこらえた。

#### 4. 訪れる小さな破局

それから数日後、授業中にまたしても櫻華は体調を崩し、保健室へ運ばれた。軽い眩暈と動悸が激しくなり、教室で立ち上がった瞬間に意識を失いかけたらしい。

京一は自分が担当する古文の授業ではなかったが、連絡を受け、保健室へ駆けつける。すると、櫻華は横になったまま苦しそうに呼吸を整えていた。

「……蔵内、しっかりしろ。大丈夫か」

保健室の先生が「まだふらつくようなので、しばらく横にならせます」と言い、京一に安易に声をかけさせない空気が流れる。

それでも、櫻華は涙目で京一を見て、小さく笑みを浮かべた。「……先生、来てくれたんだ……」

その声に京一は胸が痛む。引き裂かれるような思いでいた矢先、石川教頭が半ばあきれ顔で保健室へ入ってきた。

「吉野先生……また蔵内さんのところに？ 授業を受け持っていない時間とはいえ、ほかにも対応しなければいけない生徒がいるでしょう……」

嫌味を含んだ声に、保健の先生が困惑の表情を浮かべる。だが、石川教頭は構わず言葉を続ける。

「理事長からも繰り返し言われているでしょう。蔵内さんの特別扱いは慎重にしろ、と。いまの状況では、保健室にずっと張り付いているわけにもいかないはずですよ」

「しかし、教頭——」

京一が反論しかけるも、石川はそれを遮る。「あなたが特別視すればするほど、蔵内さんが生徒として浮いてしまうんですよ。クラスメイトの目もあるんですから」

徐々に苛立ちを含んできた声。櫻華はベッドで小さく身を縮め、唇を震わせている。確かに、石川の言葉にも一理あるかもしれない。だが、あまりに容赦のない言い方に、京一は怒りを覚える。

保健室の空気は張り詰め、周囲にいる人々が動きを止めた。そのとき、扉の向こうから急ぎ足で誰かが入ってきた。

「……先生、失礼します。私、蔵内櫻華の父です」

現れたのは蔵内一徳だった。娘が再び倒れたという連絡を受け、取り乱すように駆けつけたらしい。顔面に明らかな焦りと苦悩が浮かんでいる。

「ちょっと待ってくださいよ、教頭先生。娘がこんな状況なのに、吉野先生に会いに来るななんて……先生は私たち親子にとって、かけがえのない存在なんです！」

声を荒らげる一徳に、石川教頭は狼狽しつつも「落ち着いてください」と制止する。保健室の先生も「騒がないでください、他の生徒の迷惑になります」と小声で諭す。

だが、一徳は頭を下げながらも感情を抑えきれない。

「このままじゃ、娘が卒業まで持たないかもしれないんですよ！ それまでに、せめて……せめて吉野先生との時間を過ごさせてやりたいんです。私はそれだけが願いで……！」

その哀痛に満ちた声は、京一の胸を深く切り刻む。かつて桜子を救えずに失った自分の後悔が、いま一徳の姿と重なってまざまざと蘇る。

石川教頭は「そんな無茶なことを言われても困ります！」と押し返すように声を上げるが、一徳は激しく息を詰まらせるようにして嗚咽をこらえている。

「……お父さん、もう大丈夫……だから……」

櫻華が微かな力で体を起こそうとする。苦しげな呼吸の合間に、「先生……ごめんなさい」と京一に視線を向けた。

あまりに切ない光景に、保健室は一層の暗さに包まれる。目を伏せる京一の耳には、桜子の息づかいが重なったように聞こえた。

## 5. 記憶が差し込む夜

その日の夜、櫻華は病院に再び入院することになった。さほど大きな発作ではなかったものの、検査入院が必要との診断だ。

灯りを落とした病室に、機械の小さな電子音だけが響く。母・志穂は付き添いのためベッドの横に椅子を置き、うつらうつらしている。

櫻華は静かに目を閉じる。過剰な点滴のせいなのか、頭がぼんやりと重く、意識は揺れ動いていた。

(——先生……桜が散る……私は、どうしてこんなに苦しいの……)

まぶたの裏で、鮮明な情景が広がり始める。

——満開の桜の下。薄紅の花びらが風にあおられ、旋回するように散っていく。中学の制服を着た自分が、息を切らしながら倒れ込む。

そばには、涙声で名前を呼ぶ少年がいる。吉野京一——今よりも幼さの残る顔が、必死の形相でこちらを覗き込む。

「桜子！ 桜子！」

その叫びが、遠のく意識の端で何度もこだまする。ああ、私は春山桜子だった。京一と幼馴染みで、いつか一緒に桜を見に行こうと約束していた。

けれど、病気がそれを許してくれなくて、あの春の日に倒れ、そのまま……。

「ごめんね、京一くん……伝えたかったことがあるのに」

声にならない声が喉の奥で泡のように弾ける。意識の中で、桜子の記憶がはっきりと輪郭をもって迫ってくる。

——そう、あの日から十数年。私は桜子の想いを抱えたまま、生まれ変わって“蔵内櫻華”として再びこの世にいる。

(……今度こそ、後悔はしたくない。だから、先生——京一くん——)

瞼を開くと、病室の暗闇が戻ってきた。短い時間だったが、確信に近い実感が胸に宿る。

(私は桜子。京一くんには伝えられなかった想いを、今度こそ伝えるためにここにいるんだ。)

ベッドの横で眠る母の姿を見つめ、櫻華は苦笑する。きっと、こんなことを言ったら混乱を招くだろう。だが、桜子としての記憶はもう疑いようがないほど、鮮明だ。

心臓の鼓動が少しだけ落ち着くのを感じながら、櫻華は小さく呟く。

「京一……先生。私、思い出したよ……ちゃんと全部」

## 第九章 交わる想い、儚い再会の先

## 1. 病室に差す春の陽光

退院の許可が出たのは、櫻華が倒れてから数日後だった。軽い発作に終わり、さらなる検査入院で目立った異常は確認されなかったのだが、医師からは「体調管理をより徹底するように」と念を押されている。

病院の廊下を車椅子で進む櫻華の横では、父・一徳と母・志穂が安堵の表情を浮かべていた。

櫻華は苦笑する。自分としては完全に元気というわけではないが、とにかく学校に戻れることにほっとしている。

「よかった、娘が倒れたまま卒業もできないなんて……想像するだけで怖いんですから」

一徳は涙声を押さえてそう呟く。志穂も寄り添うように「ほんと……あとどれだけ通えるかわからないけど、できるだけ普通の高校生活を過ごしてほしいわ」と目を細める。

櫻華は胸の奥がチクリと痛んだ。桜子としての記憶を取り戻してから、彼女の“親”はかつての春山家ではなく、この蔵内夫妻だということを実感している。病弱な娘を懸命に支えてくれる二人を、決して悲しませたくない。

「大丈夫だよ、お父さん、お母さん。……少しでも長く、ちゃんと生きるから」

そう答える櫻華の声は優しく、けれどどこか切なさを帯びていた。

## 2. 教師たちの戸惑いと一縷の希望

翌日、櫻華が教室に戻ってくると、クラスメイトたちから「おかえり」「無理するなよ」と温かい言葉が飛んできた。

放課後はいつものように友人の美羽が「買い食いしてから帰ろうよ」と誘ってくれるが、櫻華は控えめに断る。体調を慮ってのことだが、心の中には別の理由があった。

——京一と、ちゃんと話したい。

一方、職員室では石川教頭が書類仕事をこなしながらも、時折目を上げては京一をちらりと見る。

保健室での騒動から日が経ち、教頭自身もあのと時の言動が少し行き過ぎだったかもしれないと自覚していた。まだ正式には謝罪していないが、京一に対する声色はやや柔らかくなっている。

そして、同僚教師の若松理香はというと、何かあれば京一と櫻華をフォローしようとあれこれ動いているらしい。彼女が弟を亡くした過去が、櫻華や京一に対する特別な感情を引き起こしているのは明白だった。

(俺がここで踏みとどまらないと、あの子はまた孤立してしまう……だけど、学校の規則との兼ね合いもあるし……)

京一は机に肘をつき、思考の渦に飲み込まれそうになる。そんなとき、誰かが控えめに職員室の扉をノックする音がした。

顔を上げれば、そこには櫻華が立っている。クラスメイトの視線をかいくぐって、わざわざ京一のもとへ来たらしい。その瞳に、強い決意が宿っているのを感じ取る。

「先生……お話、できますか」

小さな声だが、それははっきりと“お願い”を示す響きだった。

教頭や同僚教師の目を気にしながらも、京一は「少しなら」と立ち上がる。これまでのやり方では誤解を招くだけなので、できるだけ公開の場——廊下の隅など、周囲から見える場所で話すように心掛ける。

### 3. 廊下の片隅で

放課後の人通りが少なくなった廊下の角。窓から射す夕陽が、床を赤橙色に染めている。

京一は櫻華の姿を見下ろしながら、「大丈夫か？ 無理はするなよ」と声をかける。周囲には誰もいないわけではないが、すれ違う生徒や教師はふたりに注意を払うことはない。

櫻華は微かに息を吐き、「はい……もう、無理はしないつもりです」と答える。その奥には、不思議なほど落ち着いた輝きが宿っていた。

「先生、私……ようやく、全部思い出したんです。私、かつて春山桜子って名前で、先生と一緒に桜を見た少女だったってことを」

その告白に、京一は体が強張る。すでに薄々感じていたこととはいえ、**櫻華が自ら“桜子の生まれ変わり”を口にするのは初めてだ。**

数秒の沈黙の後、京一は戸惑いを隠せないまま言葉を紡ぐ。

「……やっぱり、そうなんだな。信じられない話だけど……君を見ていると、納得せざるを得ないよ」

その口調には、教師という立場を超えた安堵と悲しみが入り混じっている。桜子の姿を再び目にするなんて思わなかった。けれど、彼女は確かにここにいる——限りある命のもとに。

櫻華は一步進み出て、京一の顔をまっすぐ見つめる。

「先生、あのとき私は伝えられなかったことがあるんです。命が尽きる前に、ちゃんと想いを言葉にできなかった。でも今度こそ、私は後悔したくない……」

鼓動が高まる。廊下の遠くで誰かが話す声が聞こえるが、ふたりの世界はその音を遮断しているようだ。

「桜子は、あの日……僕目の前で……」

言葉を詰まらせる京一。そのときの光景が目には蘇る。誰もがどうすることもできず、少女の命がふっと消えてしまったあの日。桜吹雪がすべてを覆いつくした、忘れられない記憶。

櫻華はその様子を見て、小さく微笑む。

「先生、ごめんなさい、私は——」

その先を言おうとするが、廊下の向こうで石川教頭がこちらを睨むように足を止めたのが見えた。思わず、京一と櫻華は息を飲む。どうやら教頭は“教師と生徒の密談”に再び警戒心を抱いているらしい。

緊迫する空気の中、櫻華は耳打ちするようにそっと言葉を乗せる。

「……もう少しだけ、ふたりきりで話せる場所、ありませんか。ほんの少しだけでいいんです」

京一は教頭の視線を感じながらも、強引にでも彼女を遠ざけるわけにはいかない。  
(……せめて、屋外なら人目があっても不審には思われまいだろうか)

「じゃあ、校庭の隅に小さなあずまやがある。人目はあるけど、ここよりは話しやすいはずだ。……行こう」

そう告げると、櫻華はこくりと頷き、ふたりは廊下を離れる。遠目に追う石川教頭が存在がひたひたと迫るようだったが、教頭は結局声をかけることなく、その場に留まっていた。

(……教頭先生、何を考えているんだろう)

そんな不安を抱えながら、京一は戸外へ歩を進める。

#### 4. 再会の桜と、誓いの言葉

学校の片隅にあるあずまや。かつては植物研究部の生徒が利用していたらしく、今は雑草が伸び放題だが、ちょっと腰掛けるには十分なスペースだ。

日は傾きかけており、夕闇の兆しが校舎を長く影を落としている。風がそよぎ、若い緑の葉を揺らす。桜はとっくに散ってしまったが、枝先には小さな実のようなものがつき始めていた。

「……なんだか、変な感じですね。桜はもう散ってるのに、私たちは桜の話をしているんですから」



櫻華があずまやの柱にもたれかかり、しみじみと口にする。京一は隣に立ったまま、視線をどこに置くべきか迷っていた。

「前世で君は……いや、桜子は、あの日、僕の目の前で息を引き取って……。やり残したことも、伝え残したこともたくさんあった。でも、何もできなかった」  
「先生は悪くない……ただ、私の命がそこまでだっただけ。だけど、今度は違うんです。私……」

櫻華は一瞬言いよどみ、そしてゆっくりと息を吸う。  
「私、あなたのことが好きです。前世で言えなかった言葉を、今、ちゃんと伝えます。……私のことを、櫻華としてでも、桜子としてでもいい。ただ、私という存在を見てほしい」

明確な告白の言葉に、京一の胸はざわりと震える。教師として、これは許されない恋なのかもしれない。周囲の目や学校の規則を考えれば、大問題だろう。  
けれど、桜子を失った痛みを引きずりながら生きてきた自分にとって、この瞬間はあまりにも救いに近い。もう一度、彼女の思いを受け取る機会が巡ってきたのだ。

「……君の気持ちは、十分にわかった。ありがとう」  
京一はそう言いながら、握りしめた拳をそっと緩める。心の中で、いつかの桜子に重ねてしまう自分がある。だが、今目の前にいるのは“蔵内櫻華”という新しい存在なのだ。

「君が桜子だったとしても、今は櫻華なんだ。それを混同しちゃいけない。……でも、僕はもう二度と、君を目の前で失いたくないって思ってる。桜子を救えなかった後悔があるからこそ……」

最後の方は、言葉がかすれた。誓いのように吐き出したその想いは、どれほどの重荷になるだろうか。しかし、櫻華は微笑み、その手をそっと京一の指先に触れさせる。  
誰かが見ているかもしれない。ただ、今この一瞬だけは、ふたりきりの空間があった。

「ありがとう、先生。……私も、二度とあなたから離れたくない」

風が吹き、葉の擦れる音がかすかに響く。夕陽が西の空を茜色に染め、校舎とあずまやをぼんやり照らしていた。桜の花びらはもうないけれど、その季節の名残が確かにふたりを包んでいるように感じられる。

## 5. 教頭が見たもの

翌朝、石川教頭は早めに出勤し、正門付近の掃除当番の様子などを見て回っていた。すると、校庭の片隅にあるあずまやの雑草がやけに踏み均された痕跡を見つける。

「こんな場所、普段は誰も寄りつかないはずだが……」

何気なく歩み寄ると、枯れ草が少し乱れた部分に、桜色のハンカチが落ちているのを発見した。そっと拾い上げると、端に小さく「O.K.」とイニシャルが刺繍されていた。

(蔵内櫻華か……?)

石川は心の中で呟く。先日から、櫻華と吉野が特別に親しい様子が気になって仕方ない。学校の風紀を守る立場としては、見過ごせないことだ。

だが、保健室での騒動や、一徳の必死の懇願を思い出すと、強引に二人を引き離すだけが正義なのか疑問も湧く。実際、櫻華には余命がどれほど残されているのか誰にもわからない。

「……理事長に報告すべきなのか、それとも……」

教頭の胸は揺れていた。規則と人間の情との間で、答えを出しかねている。ハンカチを握りしめたまま、しばし考え込んだ末、教頭はそれをポケットにしまい、ひとまず何も言わず立ち去る。

——やがて訪れる大きな悲劇を、彼はまだ知る由もなかった。

## 第十章 揺れる灯火、告げられぬ想いの痛み

### 1. 濡れそぼつ五月雨のなかで

連休明け、聖南学院高校の校庭はしとしとと降り続く雨に煙っていた。季節が進むほどに桜の気配は薄れ、緑の葉が一層色濃くなる。

窓ガラス越しに外を見下ろすと、水溜まりがいくつもでき、小さな波紋がそこかしこに広がっていた。まるで、誰かの不安を映すように絶え間なく揺れている。

「——梅雨にはまだ早いのに、今年は雨が多いわね」

数学教師の若松理香が、つぶやくように職員室で言葉をこぼす。その足元には抱えきれないほどの採点プリントがあるが、彼女の表情はどこか虚ろだ。

「大丈夫ですか、若松先生。体調は……」

隣の席の女性教師が声をかけると、理香は小さく息をつき「ええ、なんとか」とだけ

返す。

ふと、視界の端に立つ吉野京一の姿を見とめ、彼女の胸にわずかな痛みが走る。最近、京一はずっと落ち着かない様子だ。以前にも増して何かに追われているようで、顔色も優れない。

(あの子……蔵内さんが退院してきたからかしら。ふたりに何かあったのは見え見えだし。だけど私は……)

自分には何もできない。かつて死にそうな弟を引き止められなかった苦悔が蘇り、理香はいたたまれない気持ちを胸にしまい込む。

## 2. ひっそりと学ぶ時間

一方、蔵内櫻華は保健室で過ごすことが増えていた。教室にいるときに起こる発作を極力避けるため、短時間の授業を受けては保健室に戻る、という生活リズムだ。

もっとも、病院側からも「なるべく負荷を減らし、ストレスを溜めないように」と指示されており、周囲の教員も協力的だった。石川教頭も、かつての厳しい態度が少し和らいだように見える。

「蔵内さん、今日は体調どう？」

保健室のカーテン越しに、若い看護教員が声をかける。「少し休んだら、担任の先生がプリント持ってきてくれるはずだから」

その言葉に、櫻華は心の奥が温かくなる。担任——吉野京一。教師と生徒という距離感を超えて、もう一度繋がりを取り戻せたと感じるからだ。

ほどなくして、シャラリとカーテンが動き、京一が顔を出した。周囲の看護教員を気にするように、小声で「体、大丈夫か？」と尋ねる。

「はい、少しだるくらいです。……先生、わざわざありがとうございます」

見ると、京一の手には国語や古文のプリントが数枚用意されていた。補講に近い形で学習支援をするには、まだ正式な許可が降りていないものの、最低限のサポートは許容されている。

「理事長からは、‘二人きりの長時間の補習は避けること’と釘を刺されているけど、プリントを届けるくらいなら何も問題はない」

京一の声には少し自嘲が混じる。周囲の目を気にしながら、やっとこれだけの接触が許されている。生徒同士ならありふれたことなのに、教師と生徒だと難しい——そんな苛立ちが垣間見える。

それでも、櫻華は微笑む。「これだけでも、すごく助かるんです。……先生も忙しいのに」

「別に、僕は担任として当たり前のことをしてるだけだよ。……あと、古文の課題は一緒にやると理解しやすいから、来週あたり、もう少し時間が作れたら……」

その先の言葉は霧消する。看護教員が「吉野先生、職員室からお呼びがかかってるそうですよ」と声をかけてきた。

京一は名残惜しそうに「無理しないで」と言い残し、保健室を出ていく。カーテンの隙間から射す光が、櫻華の視界をにじませた。せつかく少しだけ心を通わせられるようになったのに、やはり周囲の束縛は厳しい——櫻華はそんな思いを噛み締める。

### 3. ふと覗く影

その日の放課後、櫻華は早々に帰宅する予定だったが、靴箱へ向かう途中で微かな意識の乱れを感じ、壁に手をついて立ち止まった。

「……また、めまい？」

ひそかな声で自問すると、後ろから軽い足音が近づく。振り向くと、そこにいたのは意外にも石川教頭だった。雨に濡れた傘を手に、何か言いたげな表情を浮かべている。

「蔵内さん、無理はしないように。……大丈夫かね」

思いがけないほど優しい声音に、櫻華は目を瞬く。つい最近まであれだけ厳しかった教頭が、ここまで心配してくれるとは思わなかった。

しかし、教頭の眉間にはまだ皺が寄っている。

「吉野先生から受け取ったプリント、ちゃんとこなしているんだろう？ 勉強が遅れているわけでもないだろうし、今のところ問題はないけれど……」

「はい。宿題も課題も、体調を見ながらですが、きちんとやっています」

櫻華が素直に答えると、教頭は小さく唸るように「そうか」と呟く。その眼差しには迷いが見える。

ふいに、教頭はポケットから何かを取り出した。以前あずまやで拾った桜色のハンカチ——「O.K.」というイニシャルが端に刺繍されている。

「……これを、君が落としたんじゃないかと思ってね。校庭のあずまやの近くで見つけた。もし違ったらすまないが」

差し出されたそれを目にし、櫻華は「あっ……」と小さく声を上げた。確かに、自分のハンカチだ。あの日、京一と短い時間を過ごしたあと慌てて帰った際に落としたのだろう。

「すみません……ありがとうございます」

手を伸ばして受け取る。すると教頭は微かに唇を引き結び、目を伏せる。  
「蔵内さん、私は学校の規律を守らなければならない立場だ。だから、吉野先生と君のことを問題視してきたし、今もそれがすべて解決したわけじゃない……」

そこで言葉を切り、教頭は櫻華の顔を見据える。  
「でも、人として、君が辛い状況にいるのを知りながら、一方的に責め立てるのは間違いだと思い始めている。……だから、私も頭が混乱しているよ。どうすれば君も吉野先生も救えるのか、正解が見えないんだ」

胸が詰まる思いで櫻華は教頭を見つめる。彼の瞳には、生徒への不器用な優しさがにじんでいる。かつての一方的な厳しさとは違う、揺れる葛藤を抱えた人間の表情だった。

言葉がうまく出ず、櫻華は軽く頭を下げる。「教頭先生……ありがとうございます。でも、私……」

——私には時間がない。だから、どんなに理不尽でも少しの希望にすがりたい。そう言いかけたとき、急に視界が弾けるように白んだ。

「……っ」

頭がぐらりと揺れ、意識が遠のいていく。石川教頭が「蔵内さん？」と声を上げて腕を支えてくれるが、すでに身体が言うことをきかない。

音が遠ざかり、目の前が真っ暗になる。耳の奥で、かすかに誰かが叫ぶ声が聞こえた。

#### 4. 失意の呼び声

意識を取り戻したとき、櫻華は校内の保健室のベッドに横たわっていた。間接照明が薄ぼんやりと灯り、石川教頭と看護教員の姿が見える。

「……蔵内さん、わかるかな。大丈夫？」

看護教員が額に当てていた冷たいタオルを取りのけ、安堵の息をつく。「脈はもう安定してるけど、急に血圧が下がったみたい。驚きましたよ」

櫻華はなんとか微笑もうとするが、力が入らない。顔から血の気が引いているのが自分でもわかる。少し声を出そうとすると、扉のほうから聞き慣れた声が飛んできた。「蔵内！ 大丈夫なのか？」

吉野京一。連絡を受けて駆け込んできたらしく、息を乱している。  
石川教頭は「ここは私に任せて、お帰りになったらどうです？」と制止しようとする素

振りを見せたが、京一はかぶりを振って櫻華のベッドへ駆け寄った。  
あろうことか、教頭はそれを止めることなく、その場を譲るように一步下がる。

「……さっき、ちょっと立ちくらみがひどくて。ごめんなさい、先生」  
櫻華は弱々しく言葉を返す。京一の瞳に宿った痛切な色が心を抉るようで、どうにか目をそらしたい衝動に駆られた。  
けれど、京一はまっすぐ櫻華を見つめる。

「僕のほうこそ、こんな状態でいろいろ無理をさせてるのかもしれない。……教頭先生、ありがとうございます。蔵内を保健室まで運んでくださったんですね？」  
京一の言葉に、石川は少しだけ表情を崩して頷く。「ま、教師として当然だ。……それに、私は少し考えが変わりつつあるところだからな」  
思わせぶりの言い回しに、京一と櫻華は互いに目配せする。教頭の胸中の変化を明確に問えないまま、時間だけが過ぎていく。

## 5. 二人に訪れる束の間のやすらぎ

保健室を出たあと、石川教頭や看護教員の取り計らいで、櫻華は一時的に空き教室で休む許可を得た。保健室が立て込んでいるという名目だが、実際には「吉野先生との二人きりの時間」を作るための、教頭なりの配慮かもしれない。  
京一は意外そうに「本当にいいんですか」と確認したが、石川は「どのみち迎えが来るまで教室で待つなら、そこの空き教室で安静にしていたほうがいい」とだけ冷淡に言って去って行った。

「……教頭先生、すごく不器用だけど、優しいところもあるんですね」  
集められていない机と椅子が散らばる空き教室の一角で、櫻華は座り込んだまま微笑む。京一も床に膝をつき、彼女の顔を覗き込むようにして苦笑した。  
「今まであれだけ厳しかったのにな……。正直、驚いてる」

雨音が遠くで響き、日が暮れかけた窓の外は薄闇が迫りつつある。天井の蛍光灯がうっすらと灯るだけの教室は、どこか幻想的な空気を醸し出していた。  
櫻華はそっと京一の手を取り、「私、もう隠しません。私が桜子の生まれ変わりだつてこと」と語りかける。

「先生、もし私がまた死にそうになったら、今度は……何かしてくれますか」  
それは突拍子もない問いにも聞こえたが、櫻華にとっては切実な願いだった。十数年前に果たせなかった救いを、今度こそは掴みたい——そんな思いがにじむ。  
京一は痛みを堪えるように眼を伏せる。「……僕には、医者のように直接治してやる

力はない。だけど、君を見捨てたりしない。ドナーの話が進めば、きっと移植だって……」

そこでふいに櫻華は、小さく首を振った。「移植はしたい。けれど、それがいつ決まるかも、実際にうまくいかかわからない。もう、何度も適合検査でダメになっているし……だから、今はただ、先生が私のそばにいてくれるだけでいいんです」

視線が絡み合う。教師と生徒という身分差を越え、桜子として、櫻華として、京一は同じように彼女へ心を寄せ始めている。後戻りできない感情だ。

窓に打ちつける雨音が二人の耳を覆うように強まる。京一は櫻華の指を軽く握り返した。

「わかった。どんなに厳しい状況になっても、僕は逃げない。……教頭や理事長に叱られても、君を見守りたいから」

櫻華はその言葉にかすかな笑みを浮かべる。まるで朽ちそうな灯火が、再び灯ったような瞬間だった。もしこの先に悲劇が待っているとしたら、それでもこの時間は尊い——二人とも、そう思わずにはいられない。

## 第十一章 回り出す歯車、追い詰められる春の刻

### 1. 父の決断、母の祈り

薄曇りの朝、蔵内櫻華はいつものように病院で経過観察の診察を受けていた。

その日は父・一徳と母・志穂も同席しており、主治医の佐伯が検査数値を示しながら深刻な表情を浮かべる。

「ここ一週間、頻脈や息切れが増えていますね。心臓の状態は正直あまり良くない。移植の候補リストはまだ動きがないけれど、いつ新たなドナーが見つかってもいいよう準備だけはしておきましょう」

佐伯は昔、娘を亡くした苦い経験からか、やや沈んだ口調で言葉を選ぶ。父・一徳は喉を詰まらせ、「そう……ですか。やはり、もう長くは……」と視線を伏せる。

母・志穂も黙り込んでいるが、その肩が小刻みに震えているのがわかる。桜の季節を越えたというのに、娘の心臓はますます危うい段階に来ているのだ。

「娘は高校を卒業まで、いえ、卒業後も……生きられますよね？ あと一年半ありますが……」

一徳がさすがのように問いかける。佐伯は苦い表情を浮かべながらも、「個人差が大きいので一概には言えませんが、正直に言って楽観はできません」と答えるにとどまる。

「……ありがとうございます、先生。娘は学校に通うだけが今の希望なんです。あの子、吉野先生に会うのを何より楽しみにして……」

その言葉を聞いて、佐伯はまなざしをやわらげる。「そうですね。支えになる存在があるのは、いいことです。本人が氣力を失わないことが大切ですからね」

最後まで医者らしい態度を保ちながらも、そこにはどこか人間的な温かみが混ざっている。

診察を終え、待合室に出ると、一徳は深く息をつき、意を決したような声で妻・志穂に告げた。

「……俺は、もう一度だけ吉野先生に頼んでみる。あの子と少しでも時間を一緒に過ごしてやってくれって……。このままじゃ、櫻華が……」

「あなた……それは学校がどう言うか……」

「わかってる。でも、あの子はいつ死ぬかわからないんだ。‘あと一年半’なんて甘い話じゃないかもしれない。だったら、何を恥じることがある？ 娘が生きていられる間に、後悔しないようにしてやりたい」

強い口調で言い切った一徳の瞳には、決意と悲壮感が入り交じる。志穂も何も言えず、ただそっと夫の腕に手を置いた。二人には親として「時間が無い」という事実が重くのしかかっている。

## 2. 京一に兆す異変

その日の夕方、学校の職員室で書類整理をしていた吉野京一は、突然こめかみ辺りに刺すような痛みを感じ、思わず片手で額を押さえ込んだ。

激しい頭痛とめまい——以前にも似た症状が出たことがあったが、こんなに鋭い痛みは初めてだった。

「……っ……」

立ち上がろうとしたが、ぐらりと視界が歪む。隣のデスクにいた若松理香が驚いて声をかけた。

「吉野先生、大丈夫ですか？ 顔色が真っ青ですよ」

京一は必死に呼吸を整え、「大丈夫、ちょっと寝不足なだけ……」と答える。だが、立ち上がれないほどの痛みが襲ってくる。



理香が「保健室に行きましょう」と腕を取ろうとするが、京一は「いや、ちょっと座ってれば治まるから」とそれを拒む。そんな二人の様子を見て、周囲の教師もざわつき始めた。

(何なんだ、この痛みは……。まさか、何か大きな病気でも？……いや、考えすぎだ)

京一はそう自分に言い聞かせるが、不穏な感覚は拭えない。自分がドナー登録をしていることを思い出すと、背筋を寒気が駆け抜ける。もし自分が倒れたら、今度は誰かの命が繋がるのか——そんな不吉な考えすら頭をよぎる。

数分で痛みはやや和らいだが、京一の心には妙な焦燥感だけが残された。

### 3. 迫りくる移植の機会

翌日の放課後、蔵内櫻華は足取りを重くしながら校門を出た。父の車が待っている。いつもなら軽く言葉を交わして帰るのだが、父の表情がやけに切羽詰まっているのを感じる。

車に乗り込むと、一徳はすぐに言った。

「櫻華、明日、病院にもう一度行くぞ。ドナー候補が新たに見つかったって連絡があった」

「え……本当なの？」

一瞬、希望に胸が弾む。ずっと待ち望んできた移植の話。しかし、同時に誰かが亡くなるという悲しい現実を伴うことに気づき、すぐに言葉を飲み込む。

父は居たたまれない面持ちでハンドルを握る。「まだ確定じゃない。検査してみないと何もわからない。でも、急に話が進む可能性もあるって、佐伯先生が言った。……いいか、どんな形になっても、心の準備だけはしておけ」

櫻華の脳裏には、「桜子として死んだときの記憶」と、「今度こそ生き延びたい」という願いが交差する。そして、京一の姿も重なる。

車窓に映る自分の顔は青ざめ、薄暗い夕空が背景になって、まるで別人のように見えた。

### 4. 一徳の再度の懇願

その夜、吉野京一のアパートのインターホンが鳴った。

誰かと思えば、そこには蔵内一徳が立っている。深夜近い時間にもかかわらず、スーツ姿のまま息を切らし、京一を見つめる瞳には強い意志の光があった。

「蔵内さん……こんな時間に、何かあったんですか？」

京一はドアを開けつつ、驚きと不安で頭が混乱する。

一徳は無言で玄関先に一步入り、深々と頭を下げた。

「吉野先生、娘がお世話になっています。……実は、櫻華にドナーが見つかるかもしれないって連絡が来ました。検査次第ではすぐ手術に踏み切る可能性もあるって……」

その声はかすれている。京一は思わず息を詰まらせる。

「それは……本当なんですか。よかったじゃないですか、彼女の命が……」

「……もちろん、喜ぶべきことです。でも、手術が成功するとは限らないし、いつそのチャンスが回ってくるかもわからない。娘はいつも‘吉野先生に会えないと、病院に行く気力が出ない’と言うんです」

一徳は顔を上げ、京一に縋るような目を向けた。

「だから、どうか最後まで娘のそばにいてやってくれませんか。たとえ手術が失敗して命が助からなくても、娘が笑顔でいられるように……僕はそれを願っているんです」

数か月前にも同じような懇願をされたことを思い出す。だが、今回はさらに切迫感が強い。もう時間がない——そんな悲壮感が一徳の全身を包んでいる。

京一は拳を握りしめ、躊躇いながらも答えた。

「教師と生徒という立場があって、簡単には……でも、僕も、櫻華さんを救いたい気持ちは変わりません。今度こそ、誰かを守れるなら守りたいんです」

その言葉に、一徳は微かに眉を上げ、また頭を下げる。

「学校や世間が何を言おうと、娘のために最後まで付き合ってください。……お願いします、吉野先生」

玄関口には、深く頭を下げる父親と、動揺を隠せない京一。その姿を、夜の闇が無言で包み込んでいた。

## 5. 京一の苦悩と覚悟

一徳が帰ったあと、京一はアパートの狭い部屋で一人ソファに腰を下ろし、頭を抱え込む。

このまま突き進めば、自分の教師としての立場は危うくなる。学校側が認める範囲を超えて櫻華に寄り添えば、解雇や社会的非難は避けられないかもしれない。

だが、それでもいい——桜子を二度と失いたくない。今の櫻華も、かつて桜子だった彼女も、守りたいのだ。

「……どうして、こんなにいろいろ重なるんだろう」

そうつぶやくと、また頭痛の波がこめかみを襲う。意識が一瞬遠のきかけ、慌てて机に手をついて姿勢を正す。

ふと机の上に開いたままの和歌集が目にとまり、京一はその一首を何気なく目で追った。

いのちだに しばしもおかで なげきつつ

よしのの山に 花をたづねむ

(古今和歌集より)

「命があるうちに、少しでも花を探しに行こう」という歌だと、解説文に書かれている。儚く、しかし前向きな歌——まるで、櫻華や自分自身の姿を写しているようだ。

「僕も、花を探しに行くんだ……最後の最後まで……」

心の声が、沈黙の室内に溶ける。

ぬぐえない不安を抱えながらも、京一は明日からの行動を決意した。社会の目がどうあれ、櫻華が生きる限り、彼女の笑顔を守ろう。そう誓うと、頭痛の閃光が少しだけ遠ざかったように感じられた。

## 第十二章 崩れゆく春、重なる宿命の痛み

### 1. 満たされぬ想いと、忍び寄る不穏

季節は初夏へ移り、聖南学院高校の敷地には濃い緑の葉が茂り始めていた。

かつて桜が咲き乱れていた木々は、今や青葉を揺らし、風が通るたびにさわさわと音を立てる。しかし、蔵内櫻華の胸には「あの日の桜」がはっきりと根付いて離れない。

——桜子として命を散らした前世の記憶と、いま再び病魔に侵されながらも生き続ける現世。二つの時間を抱えた櫻華は、学校と病院を行き来する日々を送っていた。

「先生がいなかったら、私……とっくに諦めていたと思う」

夕暮れの校庭の隅、あずまやの木陰で櫻華は小さくつぶやく。対面にいるのは、古文教師の吉野京一。

教師と生徒という立場を超えた結びつきを感じつつも、周囲の目や学校の規則に阻まれて、二人だけの時間はどうしても限られている。

「僕も、君がいるからここに立ててる。……桜子を失ったときは何もできずに終わった。でも今度は、君を見捨てたくないんだ」

京一はそう言いながらも、額にうっすらと汗を浮かべる。近頃、激しい頭痛に悩まされているらしいが、本人は「過労だよ」と言って取り合わない。

桜の季節が遠ざかった校庭はひどく静かで、微かに夏の湿り気を帯びた風だけが二人の髪を揺らす。櫻華は京一の表情を見つめ、不安を拭えないまま微笑むしかなかった。

## 2. 父の懇願、迫り来る闇

あくる朝、学校に向かう直前の蔵内宅のリビングに、父・一徳が深刻な顔で現れた。手にはいくつかの書類を握りしめている。

「櫻華、ちょっと話がある。……お前のドナーの件、また少し動きがあったみたいだ」

唐突な切り出しに、母・志穂が「どういうこと？」と顔を曇らせる。櫻華の心臓移植を待つリストには変動が多く、たびたび「もしかしたらドナーが見つかるかもしれない」と連絡が入るのだが、いつも確定には至っていない。

「またか……でも、今度は確度が高いんだってさ。日本国内の登録者から連絡があって、適合検査に進む見込みがあるそうだ」

櫻華は唇を噛み、「でも、まだ‘確定’じゃないんだよね」と呟く。期待しては落とされる、その繰り返しに疲弊している自分を感じる。

「そうだな。いつ連絡が来てもいいように準備だけはしておこう。……それと、吉野先生のことだけど……」

一徳は渋い顔をして口をつぐむ。先日の学校騒動のとき、一度は「娘を先生に託す」と懇願したが、周囲の理解は得られずに終わった。しかし、限りある時間を思えば、なおも京一が存在が欠かせないことを痛感している。

苦い沈黙が落ち、母・志穂が「とにかく、櫻華を学校へ送りましょう。今日は大事な授業もあるし、無理しないように」と言い残し、車を出す準備に立ち上がる。櫻華は胸の奥に鈍い痛みを抱えながら、鞆を握りしめた。

(また……いつ、死が来てもおかしくない。それが私の現実。でも、先生だけは私を“生かそう”としてくれてる……)

## 3. 桜なき木の下で

放課後。櫻華が校庭の片隅にあるあずまやへ足を運ぶと、京一は既にそこに立っていた。

灰色の雲に覆われた空からは、今にも雨が降りそうな気配が漂う。かつて桜が咲き誇った枝先は深い緑に染まり、重くたれこめた湿った空気だけが辺りを支配している。

「先生……お顔が真っ青ですけど、本当に大丈夫？」

近づくと、京一の表情に明らかな疲労感が走っているのが分かる。彼は苦笑し、額の汗を拭う。

「ちょっと寝不足なだけ。大丈夫だよ。……それより君は？ 朝、何かあったって話を聞いたけど……」

「……うん。ドナーが見つかるかもしれないって、また連絡があった。でも、どうなるかわからない。あまり期待しすぎても辛いし……」

櫻華が視線を落としてつぶやく。京一はわずかに表情を曇らせる。「君にとっては残酷な話だよな……人の死を前提に生き延びる。でも、それが命を繋ぐ唯一の道だ」

風が吹き、あずまやの屋根を小さく揺らす。二人は黙り込み、ただ相手の存在を感じる時間が流れる。

「……先生、実は言いたいことがあるんです。私、もう一度、前世で言えなかったことを、ちゃんと伝えたい」

決心を固めたように、櫻華は振り向き、京一の瞳を見つめる。

「私は、桜子として本当は先生に‘ありがとう、大好きだよ’と言いたかった。でも、それが叶わずに死んじゃった。だから、今度こそ、生きてるうちに全部言わなきゃって……」

切々と告げられた想いに、京一は胸が詰まる。「ありがとう」であり、「大好きだよ」。教師と生徒という規則を越えた純粋な言葉が、心の壁を崩し、寄せては返す波のように京一を包み込む。彼はぎこちなく笑みを作り、「その気持ちは、十分伝わったよ」と返す。

だが次の瞬間、頭の奥に激痛が走り、京一は声を上げかける。強いめまいが視界を歪ませ、膝が崩れるのをこらえるが、櫻華は「先生っ!？」と悲鳴に近い声を上げる。

「ごめん……平気、ちょっと休めば……」

必死に言い繕う京一。櫻華が震える手で支えるが、彼女も体力がないため二人とも座り込む形になってしまう。

すぐに誰かが駆け寄ってきた気配がするが、意識は臙に遠のいていった。

## 4. 教師の急変、繰り返される悲劇

職員室に救急の連絡が走り、石川教頭と若松理香が校庭へ駆けつけると、京一はほぼ意識のない状態で地面に倒れていた。

櫻華は怯えと絶望が混ざった表情で、「また、あのときと同じ……私が桜子だったときと同じ……！」と泣き叫ぶ。

周囲の生徒が戸惑いの声を上げる中、教頭が「救急車を！ 早く！」と叫び、理香が櫻華を落ち着かせようと必死に抱きとめる。

「やだ……いやだ、先生……死なないで……」

櫻華の声はかすれている。前世の桜子として、自分が先生の前で命を散らした光景がフラッシュバックする。この悲劇をまた繰り返すのか——その恐怖が押し寄せる。

京一の瞼は閉じられ、唇は血の気を失い、額には冷たい汗が滲む。か細い呼吸音があるものの、脈拍が異常に弱いのがはっきりと伝わった。

「先生……先生……！」

遠くからサイレンの音が近づいてきた。櫻華は呼吸が乱れるが、何とか意識を保ちながら京一の手を握る。

しかし、その手の温度はどんどん失われていく気がした。

## 5. ドナー登録、そして最期の別れ

救急車で病院に運ばれた京一は、くも膜下出血と診断された。過去に感じていた頭痛は、その前兆だった可能性が高い。

母で理事長の吉野理恵や父の宗一郎、そして教頭らが駆けつけるが、医師からは「脳へのダメージが深刻で、意識が戻る見込みはほぼ無い」と告げられる。

同じ病院へ後から到着した蔵内櫻華が、待合室でその言葉を聞いた瞬間、視界が白んで倒れこむ寸前だった。

「そんな……先生は……」

一徳が「娘を家に連れ戻さなきゃ」と抱き止めるが、櫻華は「先生が死んじゃうなんて……桜子として死んだときと同じ……」と泣き崩れる。

教頭や理香も言葉をかけられないまま、理事長の理恵が病院側と掛け合い、延命措置を取るよう求めるが、すべては手遅れだった。

重い沈黙の末、父・宗一郎が「京一はドナー登録をしていた。……もし本当に助からないなら、せめて誰かの命を救う形を……」と呟く。

理恵は痛みに顔を歪めながら、「息子が自分で決めていたことなら……」と涙をこらえる。

医師たちは脳死判定を下し、京一の体をドナーとして提供する手続きを開始する。吉野家の両親はその書類にサインした。

## 6. 命のバトン、桜の宿命

京一の訃報が正式に伝えられたのは、脳死判定の成立からほどなくしてのことだった。

蔵内櫻華に「ドナーが見つかった」という緊急連絡が入ったのは、その翌日にあたる深夜。

「適合検査を急いで行ったところ、ドナーの心臓が君に合う可能性が極めて高い」という電話。櫻華はベッドから跳ね起き、両親とともに病院へ向かうが、その時点ではどこの誰の心臓かは知らされていない。

「まさか……先生がドナー登録していたなんて、知らなかった……」

朧げな意識の中でそう呟きながら、櫻華はベッドに乘せられ、ストレッチャーで手術室へ運ばれる。両親が付き添い、佐伯医師が「落ち着いて、呼吸をゆっくり」と声をかける。

心臓が抜けるような寂寥感と、不思議な昂ぶりが同時に襲ってくる。誰かの死——まさか京一なのか？ そんな疑念が頭をよぎるが、恐ろしくて直視できない。

オペ室の照明が眩しく光り、麻酔のマスクが当てられる。

「先生……私、今度こそ生きるから……」

心の中で、そう誓った瞬間、意識は遠のいていった。

## 第十三章 遥かな桜、二つの命の行方

### 1. 別れの儀式、終わらない痛み

翌日、京一は脳死状態から人工呼吸器を外され、正式にその死が確認された。

学校関係者や吉野家の両親・友人たちによって、静かな葬儀が執り行われる。突然のくも膜下出血という形で散った命に、誰もが衝撃を受け、悲しみに暮れた。

しかし、蔵内櫻華はその葬儀に参列できなかった。なぜなら彼女自身が手術の真っ最中——ドナーの心臓を移植され、ICUにいるからだ。

「先生……ごめんね、何もできない……」

朦朧とする意識の中、櫻華は幾度となく想いを繰り返す。

桜子として、前世では桜の木の下で命を落とした。そのときは、京一が何もできなかった。今度は、京一が先に逝き、櫻華を生かすための心臓を遺してくれたのだと思っ

た。

——悲しいすれ違いを、何度繰り返せばいいのだろうか。

## 2. 蘇る鼓動、京一の心臓

大手術を乗り越えた蔵内櫻華は、術後数日目にかろうじて意識を回復する。

胸には新たな心臓が刻む鼓動があり、体中の神経がまだ麻痺や痛みを伴っているが、確実に「生きている」という感覚がある。

両親が病室の外で待機する中、佐伯医師が静かに告げる。「ドナーの話を書く準備はできてるかい？」と。

「……お願いします」

それだけ答えると、佐伯は短く息をつき、「本来はこういう話はしてはいけないんだが、タイミング的にも君も察しが付いているだろう。……吉野先生、君の担任だった先生がドナーになったんだ。脳死判定が下され、遺志に基づいて心臓が提供された……」と伏し目がちに言葉を継ぐ。

櫻華は「やっぱり……」と漏らし、目を潤ませる。分かってはいたが、聞きたくなかった現実。

「先生は……私を生かすために……」

声が震え、佐伯は何も言えずに黙る。医師という立場でも、この物語のあまりの痛ましさに胸が詰まるのだろう。

櫻華は抱きしめるように自分の胸を押さえた。そこには、京一の鼓動が息づいている。

## エピローグ 永遠の春、ふたりの鼓動

### 1. 桜なき夏の日、降り注ぐ光

退院後、蔵内櫻華は転院やリハビリを経て、初秋にようやく日常生活へ戻ってきた。だが、学校へ復学するにはまだ時間があると医師から言われている。

それでも、少しずつ体力が回復し、心臓の鼓動は力強く胸を満たす。この鼓動は、自分のものだけではない。——京一の命と共にある。

ある涼しい夕方、櫻華は父の車で聖南学院高校を久しぶりに訪れた。父が理事長に挨拶するという名目についてきたのだが、本当の目的はひとつ、「桜の木にもう一度会いたい」という思いからだった。



夏も終わりに近づき、校庭の桜は黄色く色づいた葉を落としかけている。まばらな風が吹くたび、枯れ始めた葉がひらりと地面に舞い落ちる。

櫻華は一人、足を引きずるようにして桜の木へ近づく。そこはかつて桜子としての自分が倒れ、今世では京一が息を失った場所でもあった。

(先生、私はここにいる。先生の心臓と一緒に……)

葉の隙間から黄昏の光がこぼれ、木漏れ日が櫻華の足元に斑模様を描く。空気は少し湿り気を含み、近くのプールからは夕陽が差し込んでまばゆい反射を放っている。

## 2. 浮かぶ短歌、京一からのメッセージ

ふと、櫻華の頭の中に、一首の短歌がぼんやりと浮かんだ。

それは古文の授業や自習で目にしたことがある歌——けれど、なぜこのタイミングで脳裏に蘇るのか、自分でもわからない。ただ、京一の声のようにも感じられる。

あだし世を いかにかすべき 桜花

散るといふことは なにとしもしなし

(『古今和歌集』より)

「この儚い世をどう生き抜けばいいのか——桜が散るなんて、どうということはない」。

読んだときは難解に思えた歌が、いま、まるで先生が語りかけてくるように胸に響く。「散ることなんて恐れずに、いまを生きよ」と言われている気がするのだ。

「先生……これは、あなたが私に送ってくれた言葉なの……？」

櫻華は呟きながら、左胸に手を当てる。そこには京一の心臓が鼓動している。桜の花が散るのは自然の営み。けれど、散るからこそ美しい。人の命も同じかもしれない。

その痛みと悲しみを抱えながらも、命は繋がり、想いは続く——短歌の声が、まるで京一からのメッセージのように感じられ、櫻華の瞳から涙が溢れる。

## 3. 降り注ぐ光、二度目の春に向かって

周囲には誰もいない。学校は放課後の静けさを増し、遠くで運動部が練習する声が微かに聞こえるだけだ。

桜の木の根元に手を触れ、櫻華はそっと目を閉じる。前世で桜子として散った命、そして今、京一の心臓を宿して生きる自分。

——桜が散っても、また来年咲くように、私たちは何度でも巡り合い、命を繋いでいく。そんな思いが、短歌とともに胸を満たす。

夕陽が斜めに射し込み、校庭の陰影が深まる。風が葉を揺らし、かさと音を立てた。その音が、不思議と「まだ大丈夫、僕はここにいるよ」と答える京一の声のように聞こえる。

「ありがとう、先生。あなたが残してくれた心臓と、この短歌があるから、私は歩いていける」

視線を上げると、桜の枝先には次の春に備えた小さな芽が隠れているのがわかった。

もうすぐ葉が落ち、木は冬を越える。けれど、きっと春になればまた花が咲く。そのころ櫻華は元気に歩けるようになり、来年こそはこの木の下で笑う自分の姿をイメージできた。

「散るといふことは なにとしもし……」

その短歌がもう一度、頭の中で小さく木霊する。まるで京一が微笑みながら添削してくれるような気がして、櫻華は涙の合間に微笑んだ。

どこまでも続く青い空が広がり、風が最後の葉をさらう。春はまだ遠いが、櫻華にとっては永遠に「先生」と生きていく春が、胸の奥で優しく燃え続けている。

(完)